

EAC

令和3年度
富士山麓外来植物等調査業務委託

報 告 書
(抜粋)

令和4年1月

株式会社 環境アセスメントセンター

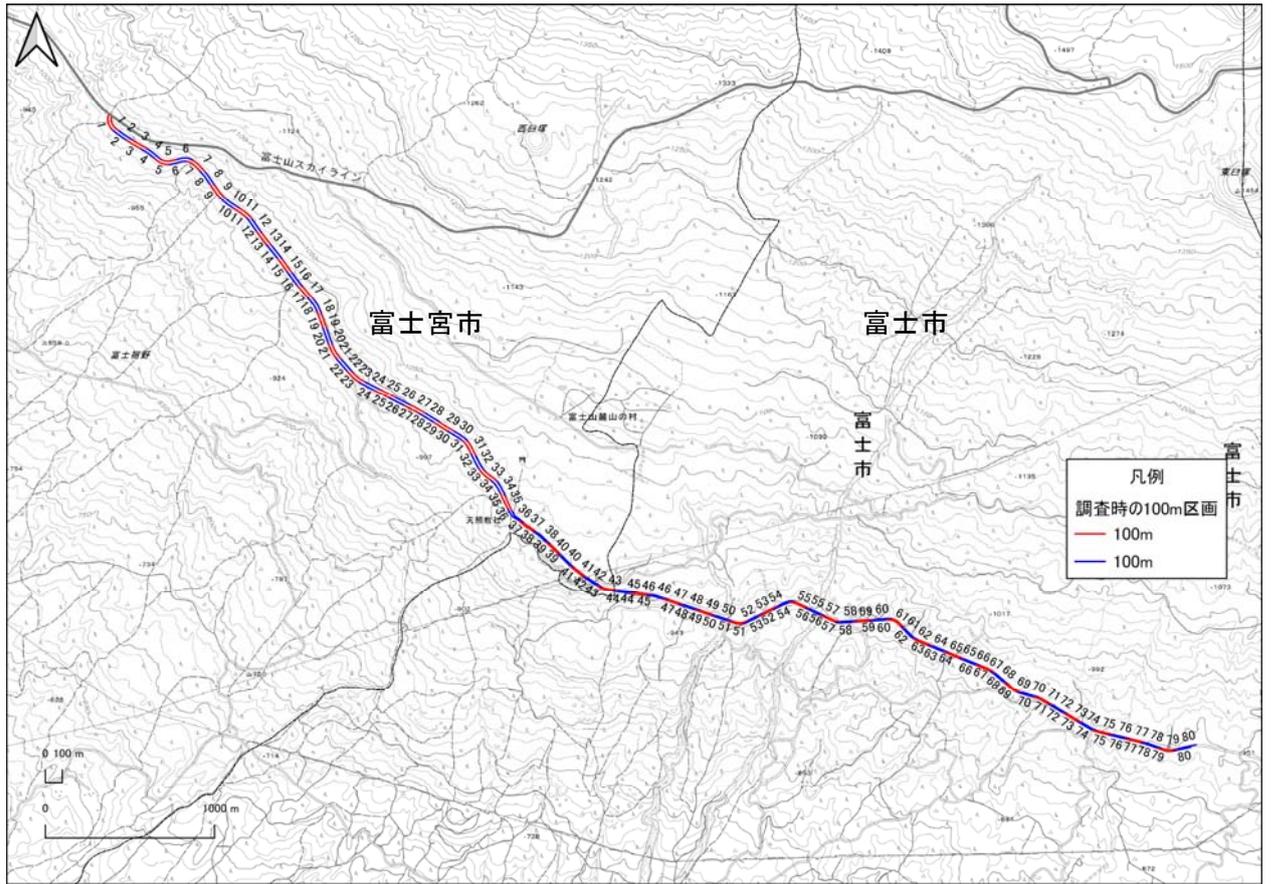


図 1.6.1 5月、7月調査場所位置図（富士山麓線 8.0km）



図 1.6.2 9月調査場所位置図（富士山麓線富士市内の 3.7km）

表 1.5.2 外来植物選定基準

法律等	カテゴリ		
特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（平成 16 年 6 月 2 日法律第 78 号）（最終改正：平成 26 年 6 月 13 日号外 法律第 69 号）【外来生物法】	特定外来生物 （最終更新：令和 3 年 8 月 13 日） 外来生物（海外起源の外来種）であって、生態系、人の生命・身体、農林水産業へ被害を及ぼすもの、又は及ぼすおそれがあるもの。		
我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（環境省報道発表資料「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」の公表について（お知らせ）、平成 27 年 3 月 26 日） 【生態系被害防止外来種リスト】	定着予防外来種	侵入予防外来種	国内に未侵入の種。特に導入の予防、水際での監視、バラスト水対策等で国内への侵入を未然に防ぐ必要がある。
		その他の定着予防外来種	侵入の情報はあるが、定着は確認されていない種。
	総合対策外来種	緊急対策外来種	「外来種被害防止行動計画（環境省・農林水産省・国土交通省, 2015）」における対策の優先度の考え方（注 1）に基づき、被害の深刻度に関する基準①～④のいずれかに該当することに加え、対策の実効性、実行可能性として⑤に該当する種。特に緊急性が高く、特に各主体がそれぞれの役割において、積極的に防除を行う必要がある。
		重点対策外来種	「外来種被害防止行動計画（環境省・農林水産省・国土交通省, 2015）」における対策の優先度の考え方（注 1）に基づき、被害の深刻度に関する基準として①～④のいずれかに該当する種。甚大な被害が予想されるため、特に、各主体のそれぞれの役割における対策の必要性が高い。
		その他の総合対策外来種	/
産業管理外来種	産業又は公益的役割において重要であり、現状では生態系等への影響がより小さく、同等程度の社会経済的効果が得られるというような代替性がないため、利用において逸出等の防止のための適切な管理に重点を置いた対策が必要な外来種。利用にあたっては種ごとに示す利用上の留意事項（注 2）に沿って適切に管理を行うことを呼びかけるもの。		

注 1) 緊急対策外来種、重点対策外来種における対策の優先度の考え方

(被害の深刻度)

- ①生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大
- ②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い
- ③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い
- ④人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対し甚大な被害を及ぼす

(対策の実効性、実行可能性)

- ⑤防除手法が開発されている、又は開発される見込みがある等、一定程度の知見があり、対策の目標を立て得る。

注 2) 利用上の留意事項

産業管理外来種については、利用の回避・抑制、侵略性のない代替種の開発・普及又はリスクを低減若しくは抑制するための管理の実施・普及が期待される。掲載種には種毎に利用状況や利用上の留意事項を記載しており、産業管理外来種については利用上の留意事項に沿って適切な管理を行うことが期待される。

2.2 外来植物

2.2.1 結果概要

外来植物の確認状況を表 2.2.1 に示す。

外来植物は、4 科 15 種 2,682 地点 14,041 個体を確認した。このうち、シナダレスズメガヤは平成 26 年度～令和 2 年度に実施された富士山麓外来植物等調査において確認されておらず、本調査が初確認の種である。15 種全てが生態系被害防止外来種で、特定外来生物の確認はなかった。

本年度確認された生態系被害防止外来種の中で、最も個体数が多かった種は、ヒメジョオン（4,500 個体）であり、次いでハルガヤ（3,530 個体）、セイヨウタンポポ（2,153 個体）、イタチハギ（2,118 個体）の順であった。

一方、分布の広がりを示す区画数は、セイヨウタンポポ（158 区画）が最も多く、次いでヒメジョオン（137 区画）、カモガヤ（47 区画）、イタチハギ（37 区画）の順であった。

以上よりヒメジョオン、セイヨウタンポポは広範囲に分布し個体数も多いのに対し、ハルガヤ、イタチハギは個体数が多いものの、分布範囲が限られることが分かる（図 2.2.1）。

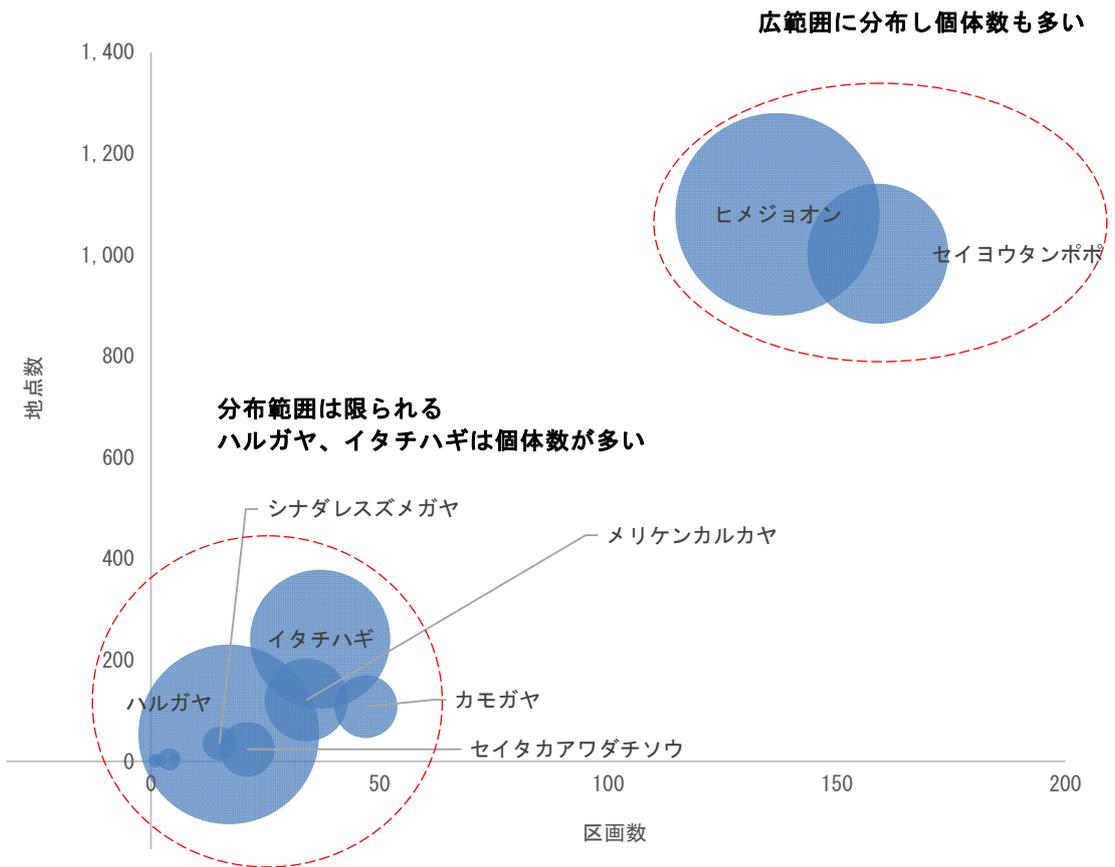
表 2.2.1 外来植物確認状況一覧（ピンク色の網掛けは個体数上位 4 種）

科名	種名	外来植物選定基準		現地確認状況								
		外来生物法	生態系被害防止外来種	上り線			下り線			全体		
				区画数	地点数	個体数	区画数	地点数	個体数	区画数	地点数	個体数
イネ	シナダレスズメガヤ		重点	1	2	4	14	33	120	15	35	124
マメ	イタチハギ		重点	18	95	1,098	19	146	1,020	37	241	2,118
キク	オオブタクサ		重点	2	2	6	0	0	0	2	2	6
キク	セイタカアワダチソウ		重点	9	10	306	12	14	24	21	24	330
キク	セイヨウタンポポ*		重点	79	693	1,322	79	309	831	158	1,002	2,153
イネ	メリケンカルカヤ		その他	9	16	56	25	105	690	34	121	746
イネ	ハルガヤ		その他	11	31	2,586	6	22	944	17	53	3,530
イネ	オオクサキビ		その他	2	2	14	0	0	0	2	2	14
マメ	アレチヌスビトハギ		その他	0	0	0	1	2	2	1	2	2
タデ	ヒメスイバ		その他	1	1	8	3	3	45	4	4	53
タデ	エゾノギシギシ		その他	0	0	0	2	2	2	2	2	2
キク	ヒメジョオン		その他	77	790	3,072	60	290	1,428	137	1,080	4,500
キク	フランスギク		その他	0	0	0	1	1	20	1	1	20
イネ	カモガヤ		産業	29	69	176	18	39	256	47	108	432
イネ	ナギナタガヤ		産業	5	5	11	0	0	0	5	5	11
4 科	15 種	0 種	15 種	のべ 244	1,716	8,659	のべ 240	966	5,382	のべ 484	2,682	14,041

注) 外来植物選定基準

- ・特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(平成 16 年 6 月 2 日法律第 78 号)
- ・我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト(生態系被害防止外来種リスト)(平成 27 年 3 月 26 日公表)
 - 重点：総合的に対策が必要な外来種（総合対策外来種） 重点対策外来種
 - その他：総合的に対策が必要な外来種（総合対策外来種） その他の総合対策外来種
 - 産業：適切な管理が必要な産業上重要な外来種（産業管理外来種）

※：セイヨウタンポポは生態系被害防止外来種リストの「外来性タンポポ種群」に該当する。



※「●」の大きさは、外来植物の個体数を示す

図 2.2.1 富士山麓線における外来植物の分布の広がり と 個体数



写真 2.2.1 外来植物確認種写真 (1/2)



写真 2.2.2 外来植物確認種写真 (2/2)

2.2.2 種ごとの確認状況

外来植物の種ごとの確認状況を次項に示す。外来植物の解説は、環境省ホームページにおいて公表されている「生態系被害防止外来種リスト選定の根拠情報」や図鑑等から引用し整理した。

(1) 総合対策外来種（重点対策外来種）

甚大な被害が予想されるため、特に、各主体（国、地方公共団体、国民等）のそれぞれの役割における対策の必要が高いと定義される、総合対策外来種（重点対策外来種）は、シナダレスズメガヤ、イタチハギ、オオブタクサ、セイタカアワダチソウ、セイヨウタンポポの3科5種を確認した。

1) シナダレスズメガヤ

上り線の1区画で、2地点4個体、下り線の14区画で33地点120個体、計15区画で35地点124個体を確認した。一部で群生する箇所もあったが、地点ごとの確認個体数は少なかった。確認地点の環境は路傍の日当たりの良い草地で、他の植物と混生していた。

表 2.2.2 種の解説（シナダレスズメガヤ）

種名等	シナダレスズメガヤ（イネ科） 別名・流通名：ウイーピングラブグラス、セイタカカゼクサ
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（重点対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	（被害の深刻度） ①生態系被害に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。 ③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。
特に問題になる 地域や環境	河原、海岸砂浜
原産地・分布	アフリカ南部原産。ヨーロッパ、アジア、オーストララシア、北アメリカ、南アメリカ、大西洋諸島に分布。1959年に四国農業試験場に導入後、各地に導入。北海道、本州、四国、九州、琉球に分布。
特徴	多年草。茎は密に束生、高さ1.2m。叢生して密な大株となる。葉は長さ40-60cm、幅1.5-2mm。花期は8-10月ごろ。小穂は淡緑色でやや黒紫色を帯びる。
生育環境等	牧草地、路傍、荒地、河原等に生育する。日当たりの良い、砂質土壌を好む。
影響	河原や砂丘に侵入して大株となり、在来植物と競合し、駆逐する。砂の堆積を促進することで、生態系の物理的な基盤を変化させる。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



シナダレスズメガヤ

(令和3年9月21日撮影)



シナダレスズメガヤ

(令和3年9月21日撮影)

写真 2.2.3 シナダレスズメガヤの確認状況写真

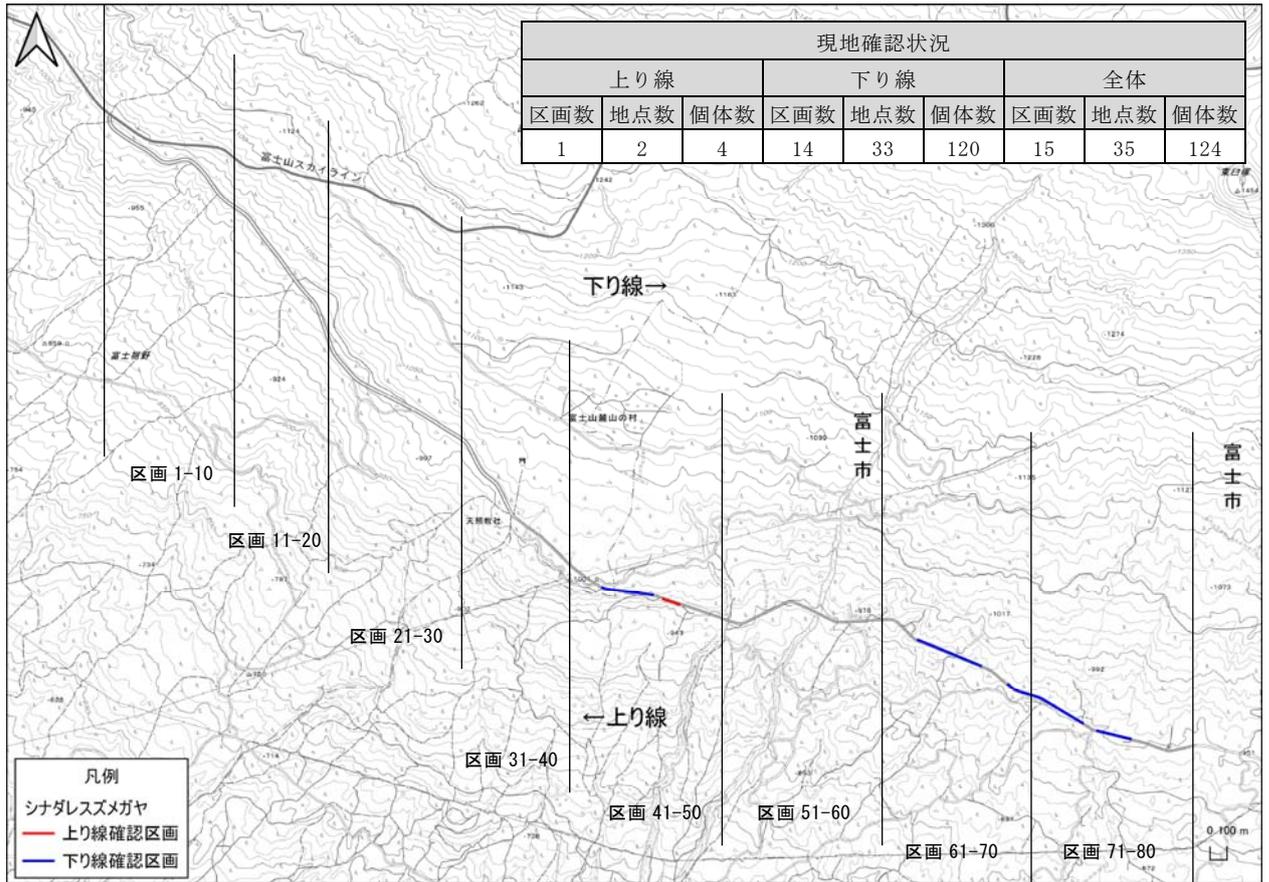


図 2.2.2 シナダレスズメガヤの確認位置図

2) イタチハギ

上り線の18区画で、95地点1,098個体、下り線の19区画で146地点1,020個体、計37区画241地点2,118個体を確認した。群生する箇所が多く個体数も多かった。確認地点の環境は路傍の日当たりの良い草地で、他の植物と混生していた。

本種は、富士山の外来植物ハンドブック（ふじさんネットワーク, 2018）において、「富士山への侵入を防ぎたい要注意・外来植物」として掲載されているため、富士山麓線でも積極的な対策を実施することが望ましい。

表 2.2.3 種の解説（イタチハギ）

種名等	イタチハギ（マメ科） 別名・流通名：クロバナエンジュ
外来植物 選定基準	外来生物法：－ 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（重点対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。 V. 生態系被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えており、かつ分布拡大・拡散の可能性もある。
対策優先度の 要件	（被害の深刻度） ①生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。 ②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い。 ④人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす。
特に問題になる 地域や環境	河川敷、海岸、亜高山帯、リンゴ園周辺
原産地・分布	北アメリカ原産。ヨーロッパ、アジアに分布。1912年に渡来。1940年代以降に本格的に導入。北海道、本州、四国、九州、琉球に分布。
特徴	高さ4m、落葉低木。葉は薄く6-20対の小葉からなる奇数羽状複葉。5-7月に黒紫色の花をつける。萌芽力があり、生長が速い。
生育環境等	荒地、路傍、崩壊地、土手、河原、海岸、自然度の高い亜高山帯にも定着し、生育する。
影響	河川を中心に分布を拡大しており、河原の在来植物と競合、駆逐する等の理由で、多くの都道府県で侵略的な外来植物とされている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ（<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>）（2022年1月17日確認）



イタチハギ

（令和3年9月21日撮影）



生育環境

（令和3年9月21日撮影）

写真 2.2.4 イタチハギの確認状況写真

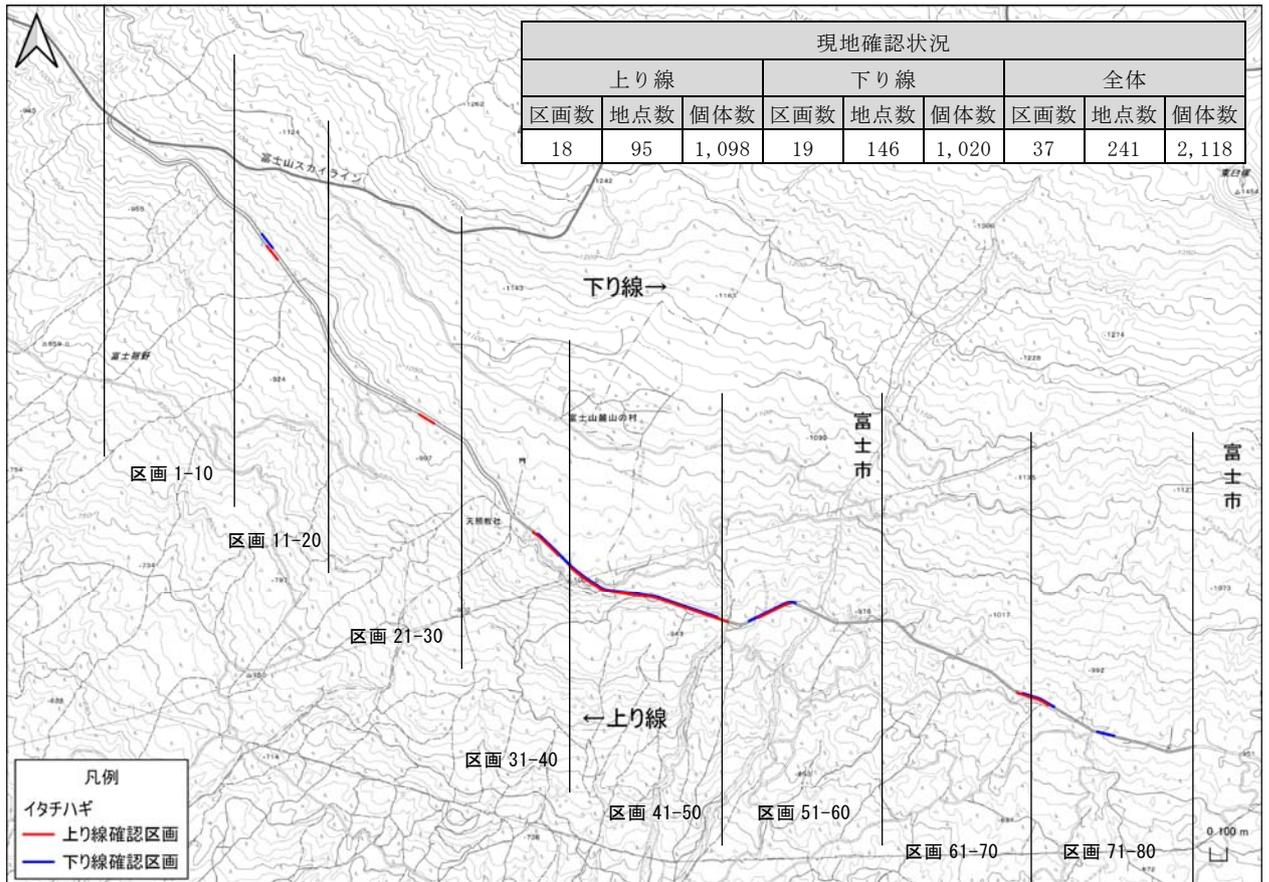


図 2.2.3 イタチハギの確認位置図

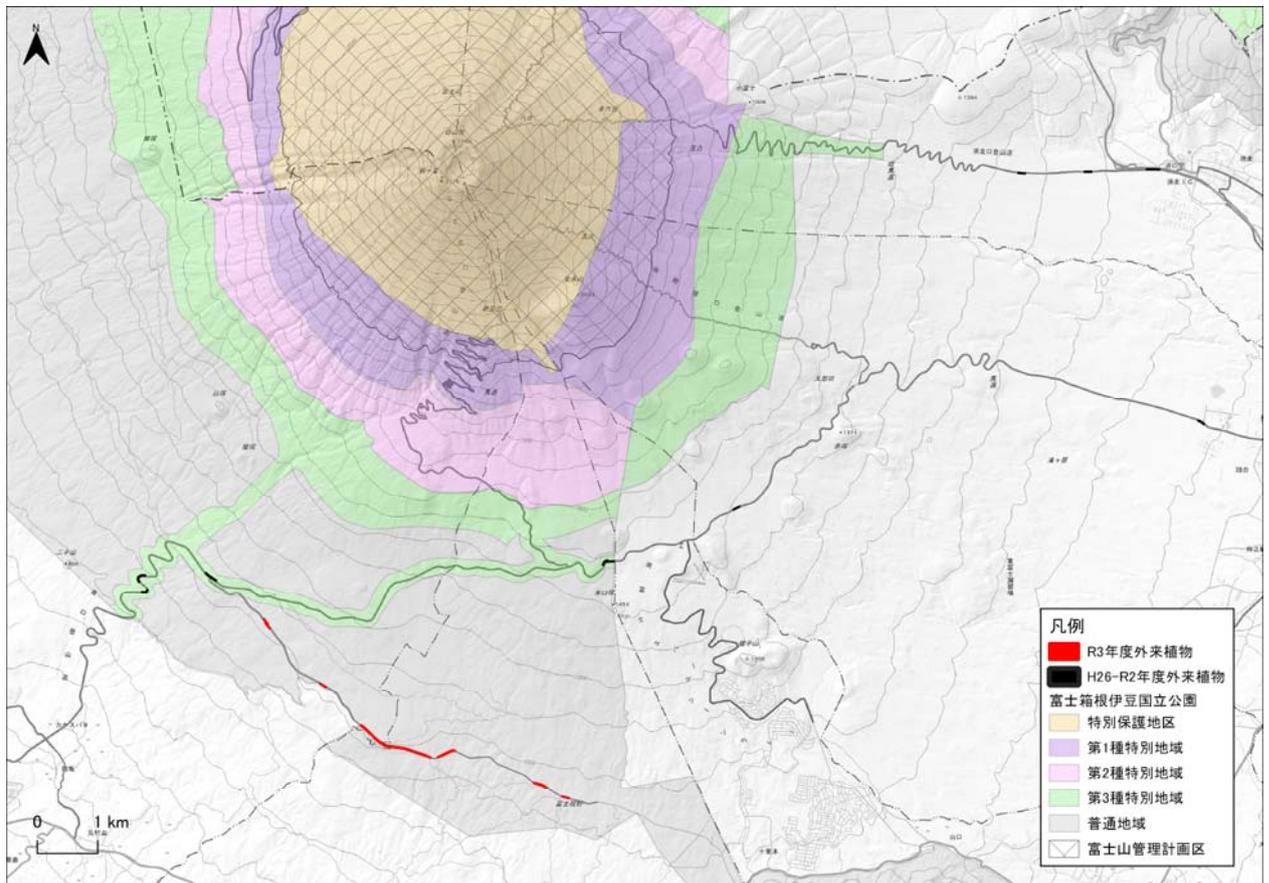


図 2.2.4 イタチハギの経年確認位置図

3) オオブタクサ

上り線の2区画で、2地点6個体を確認した。下り線では確認がなかった。確認地点の環境は近年に整備されたと考えられる法面であることから、偶発的に持ち込まれた種子が発芽生長した個体と考えられる。

表 2.2.4 種の解説（オオブタクサ）

種名等	オオブタクサ（キク科） 別名・流通名：クワモドキ
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（重点対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	（被害の深刻度） ①生態系被害に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。 ③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。
特に問題になる 地域や環境	湿地や河原
原産地・分布	北アメリカ原産。ヨーロッパ、アジアに分布。1952年渡来、北海道～九州、琉球に分布。
特徴	一年草。高さ1-6m。葉は掌状に3～7裂し、裂片は細長く尖って、両面ともざらつく。7-10月頃、茎の先に細長い穂をつける。
生育環境等 影響	畑地、牧草地、空地、堤防、鉄道線路沿い、河原など、やや湿り気のある場所に大きな群生する。 埼玉ではヨシやスゲ類など湿性草原の植物を駆逐。愛知県でも低湿地の植物への影響が懸念。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



オオブタクサ

(令和3年7月9日撮影)



生育環境

(令和3年7月9日撮影)

写真 2.2.5 オオブタクサの確認状況写真

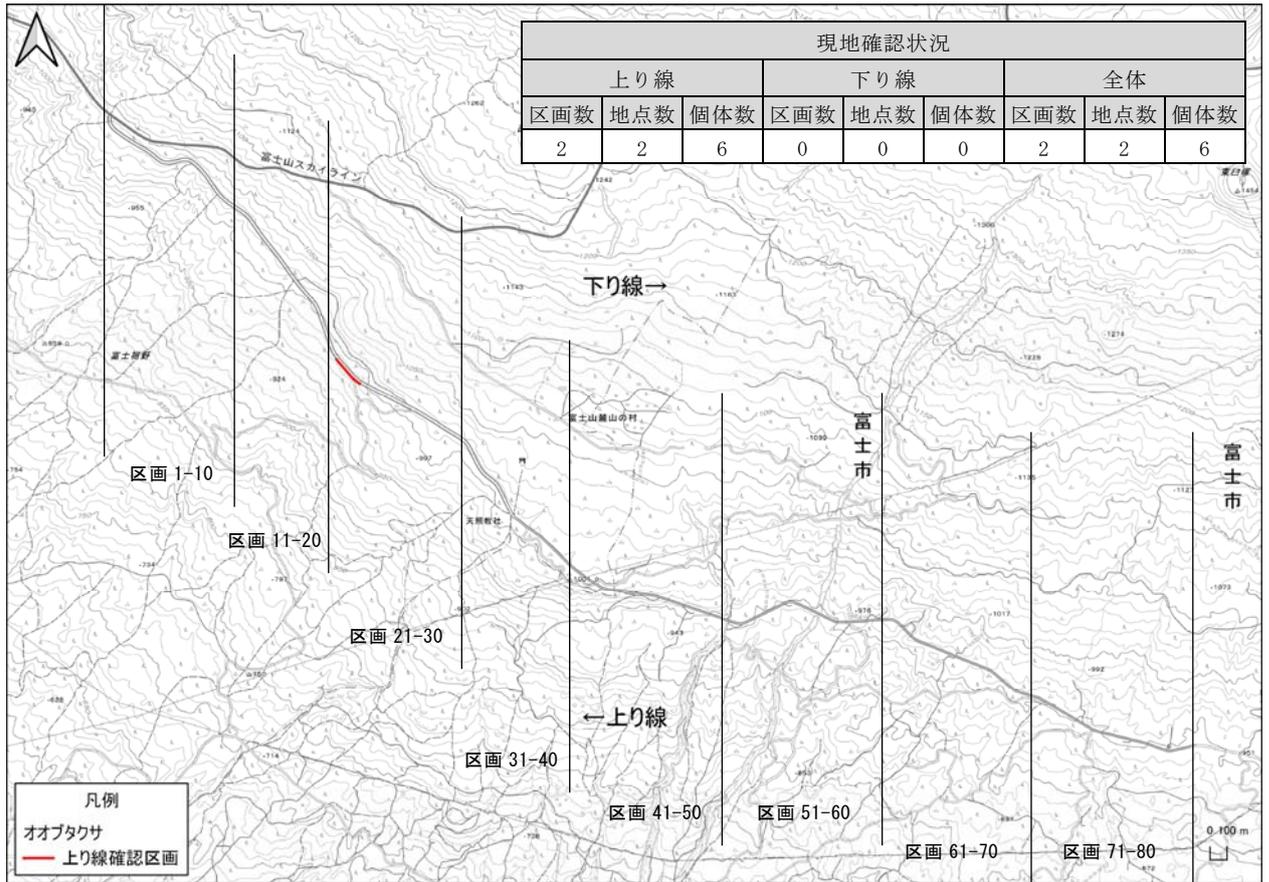


図 2.2.5 オオブタクサの確認位置図

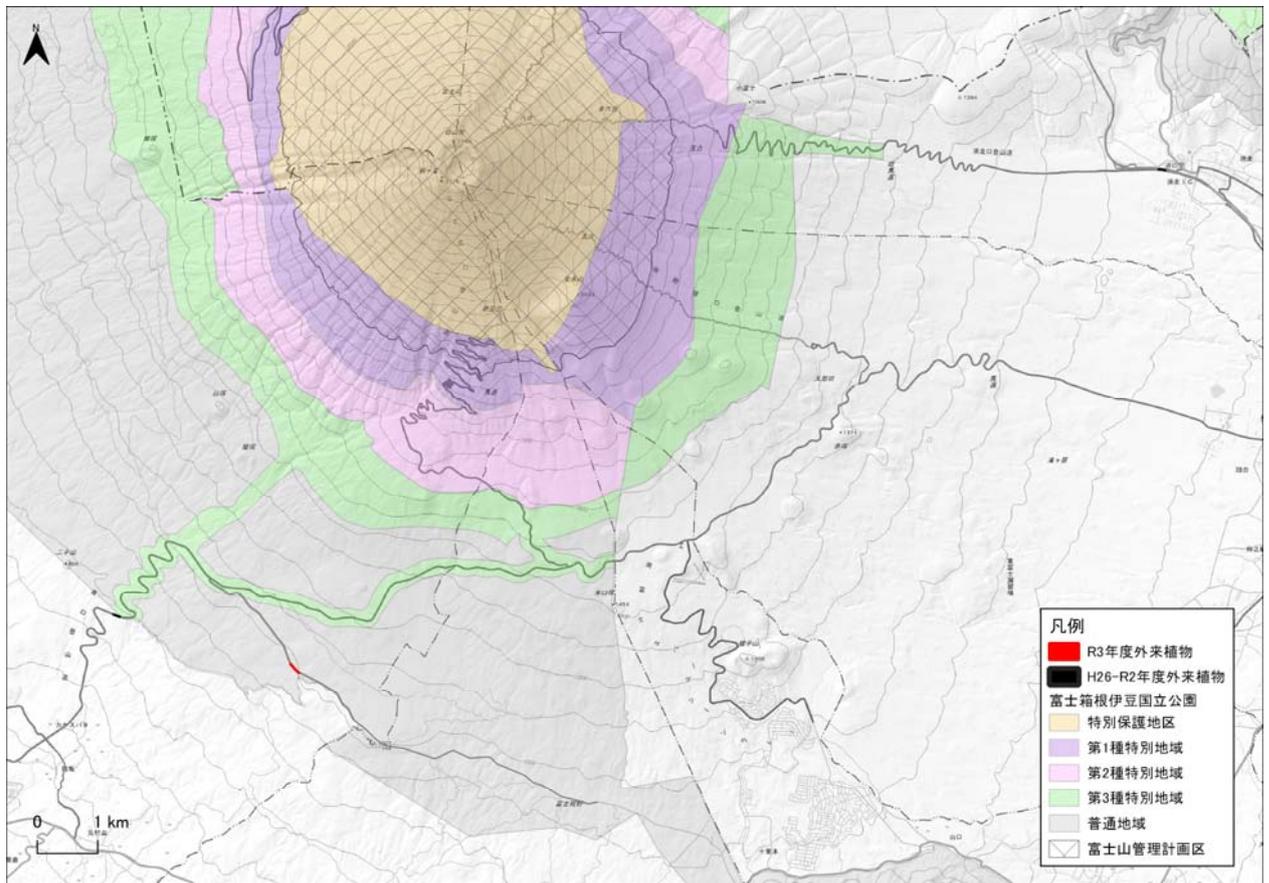


図 2.2.6 オオブタクサの経年確認位置図

4) セイタカアワダチソウ

上り線の9区画で、10地点306個体、下り線の12区画で14地点24個体、計21区画24地点330個体を確認した。上り線の一部では群生し、個体数も多かった。確認地点の環境は路傍の日当たりの良い草地で、他の植物と混生していた。

表 2.2.5 種の解説（セイタカアワダチソウ）

種名等	セイタカアワダチソウ（キク科） 別名・流通名：セイタカアキノキリンソウ
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（重点対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	(被害の深刻度) ①生態系被害に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。 ②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い。 ③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。
特に問題になる 地域や環境	湿原・湿地
原産地・分布	北アメリカ原産。ヨーロッパ、アジアに分布する。国内へは観賞用植物として明治時代（1897年頃）に渡来、大正末期から野生化、戦後、急速に分布拡大。北海道、本州、四国、九州、琉球、小笠原に分布する。
特徴	多年草。高さ2.5m。花期は8-11月。頭状花。虫媒花。瘦果は風などにより伝播される。地下茎により繁殖する。
生育環境等	路傍、空地、河川敷、土手、原野、休耕地に大群落を作る。造成によって攪乱された環境が増えると繁殖する。
影響	湿原、草原、河川敷、奄美地域など、生物多様性の保全上重要な環境や地域、または農業上問題となる場所では、対策の対象になっている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



セイタカアワダチソウ

(令和3年7月9日撮影)



生育環境

(令和3年7月9日撮影)

写真 2.2.6 セイタカアワダチソウの確認状況写真

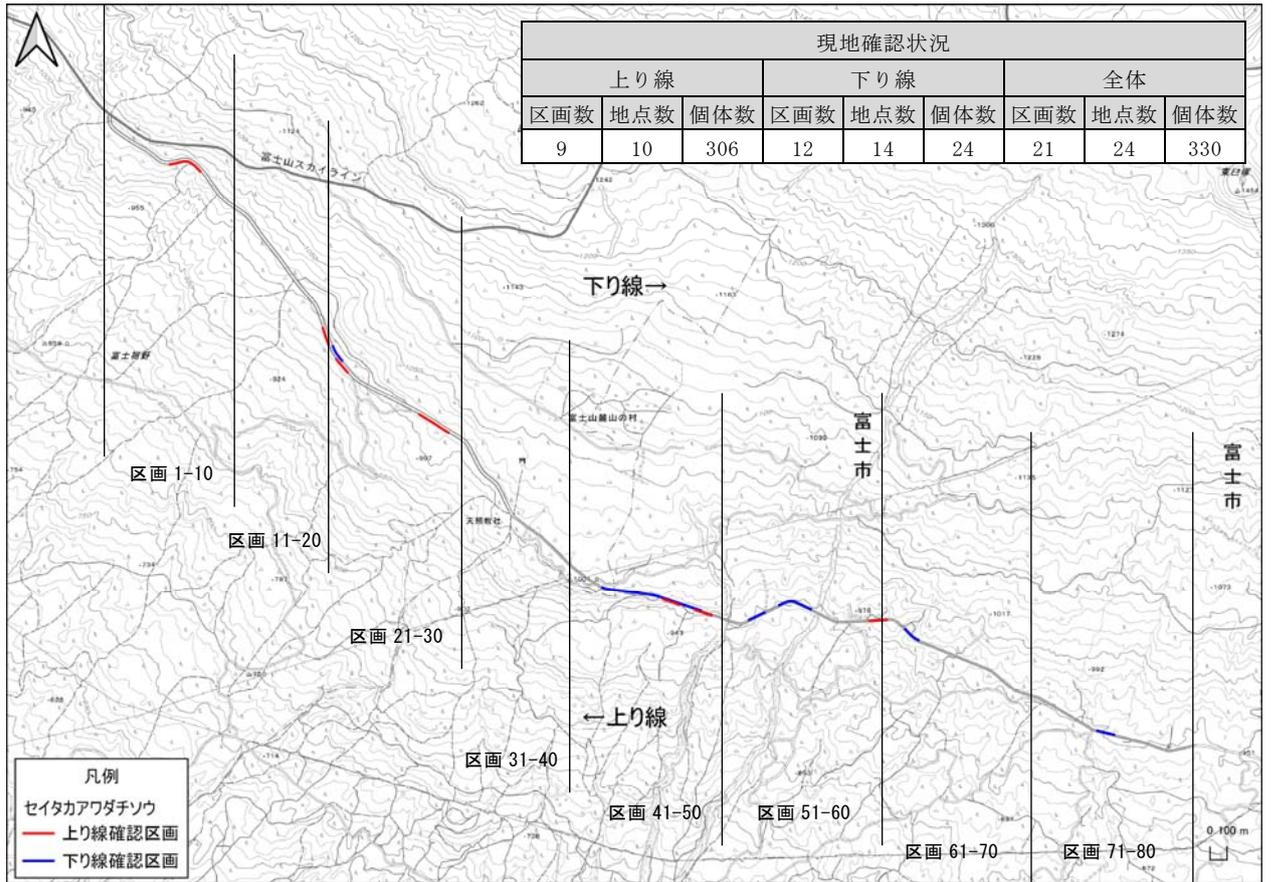


図 2.2.7 セイタカアワダチソウの確認位置図

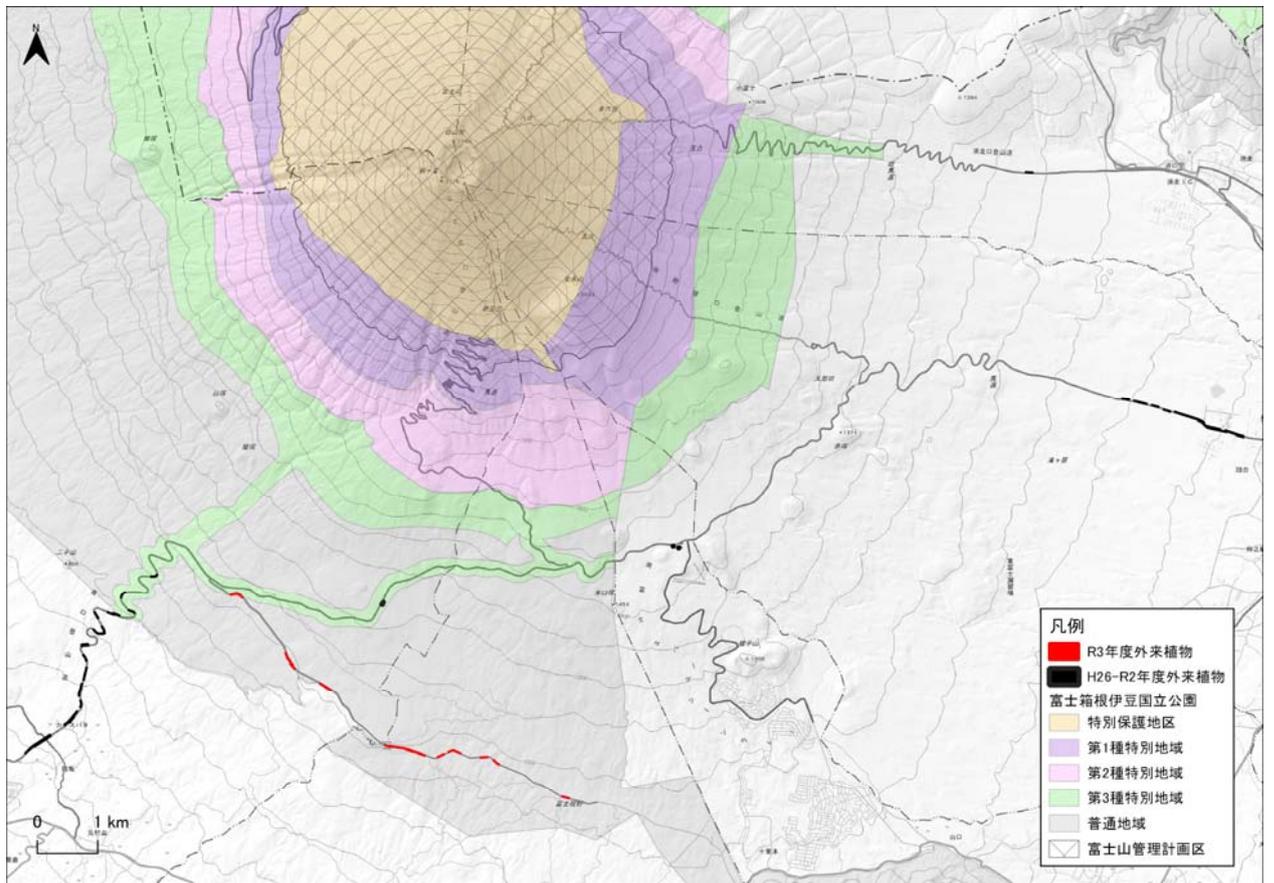


図 2.2.8 セイタカアワダチソウの経年確認位置図

5) セイヨウタンポポ

上り線の79区画で、693地点1,322個体、下り線の79区画で309地点831個体、計158区画1,002地点2,153個体を確認した。地点あたりの個体数は少ないがほぼ全域に分布していた。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

本種は、富士山の外来植物ハンドブック（ふじさんネットワーク, 2018）において、「富士山への侵入を防ぎたい要注意・外来植物」として掲載されているため、富士山麓線でも積極的な対策を実施することが望ましい。

表 2.2.6 種の解説（セイヨウタンポポ）

種名等	セイヨウタンポポ（キク科） 生態系被害防止外来種リストにおける種名：外来性タンポポ種群
外来植物 選定基準	外来生物法：－ 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（重点対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	I. 生態系被害のうち交雑が確認されている、またはその可能性が高い。 II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	(被害の深刻度) ①生態系被害に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。 ②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い。 ③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。
特に問題になる 地域や環境	自然草原や高山
原産地・分布	ヨーロッパ原産。世界中に分布する。国内へは1940年に北海道に渡来。北海道～九州、琉球、小笠原に分布する。
特徴	多年草。高さは10-40cm。花期は3-5月。単為生殖により結実する。瘦果は風、雨、動物、人間などにより伝播される。根茎切片による繁殖力は強く、どの部分の切片からも出芽する。
生育環境等	市街地、道端、空き地、畑地、牧草地、芝地、樹園地、川岸、山地、高山の駐車場まで生育する。
影響	繁殖力が強く、国立公園内の亜高山帯等の自然性の高い環境にも侵入し、在来種との競合のおそれがある。在来種との雑種が全国的にみられ、遺伝的攪乱が既に広く起こっていることが確認されている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



セイヨウタンポポ

(令和3年5月18日撮影)



生育環境

(令和3年5月18日撮影)

写真 2.2.7 セイヨウタンポポの確認状況写真

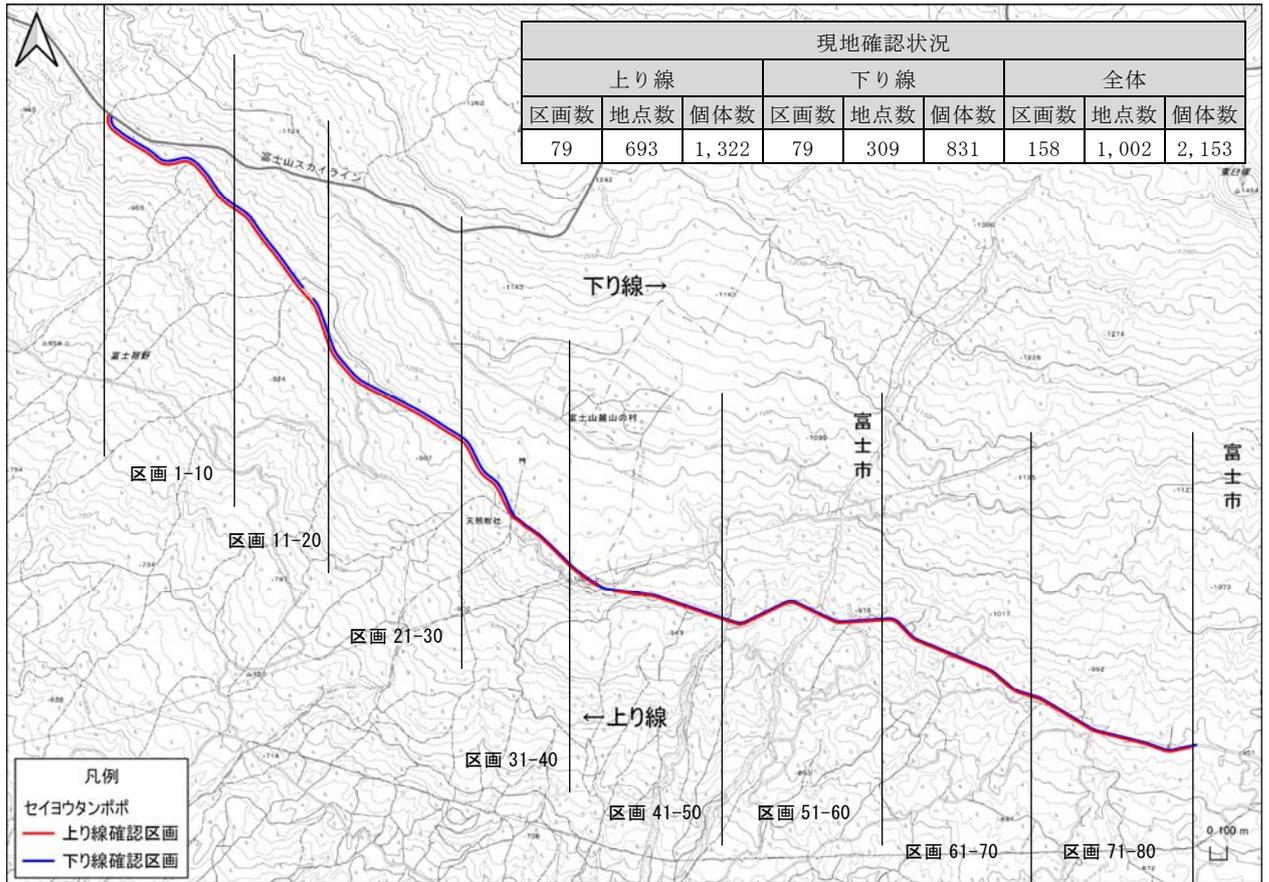


図 2.2.9 セイヨウタンポポの確認位置図

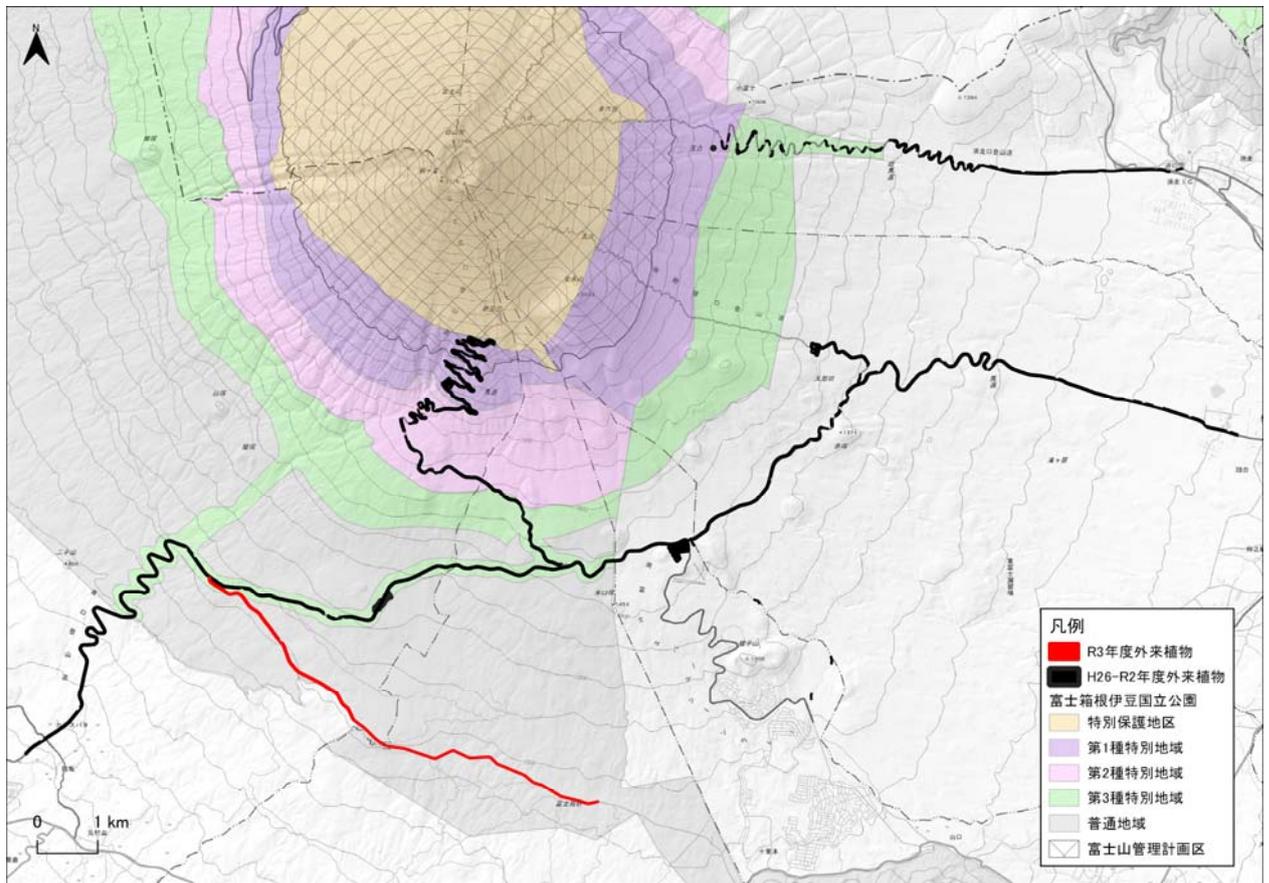


図 2.2.10 セイヨウタンポポの経年確認位置図

(2) 総合対策外来種（その他の総合対策外来種）

総合対策外来種（その他の総合対策外来種）は、メリケンカルカヤ、ハルガヤ、オオクサキビ、アレチヌスビトハギ、ヒメスイバ、エゾノギシギシ、ヒメジョオン、フランスギクの4科8種を確認した。

1) メリケンカルカヤ

上り線の9区画で、16地点56個体、下り線の25区画で105地点690個体、計34区画121地点746個体を確認した。分布は富士山麓線の南東側に集中していた。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

表 2.2.7 種の解説（メリケンカルカヤ）

種名等	メリケンカルカヤ（イネ科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	雑木林、草地、河川敷
原産地・分布	北アメリカ原産。南アメリカ、東アジア、オーストラリア、太平洋諸島に分布。1940（昭和15）年頃に入り、本州（関東以西）、四国、九州に分布。
特徴	多年草。高さ1m。茎は叢生し、次第に大株となる。花期は9-10月。晩秋に葉鞘につつまれた穂をつける。穎果は主に風により伝播される。
生育環境等	畑地、樹園地、牧草地、路傍、荒地などに生育する。日当たりが良く、土壌が乾いた所に多い。酸性土壌や岩山にも生育する。
影響	埼玉では雑木林にも侵入し、センブリ群落を駆逐。愛知県では希少種のウンヌケ絶滅危惧Ⅱ類（VU）やウンウケモドキ（準絶滅危惧（NT））と競合。在来植物が生育困難な酸性土壌にも侵入し、裸地環境を改変する。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)

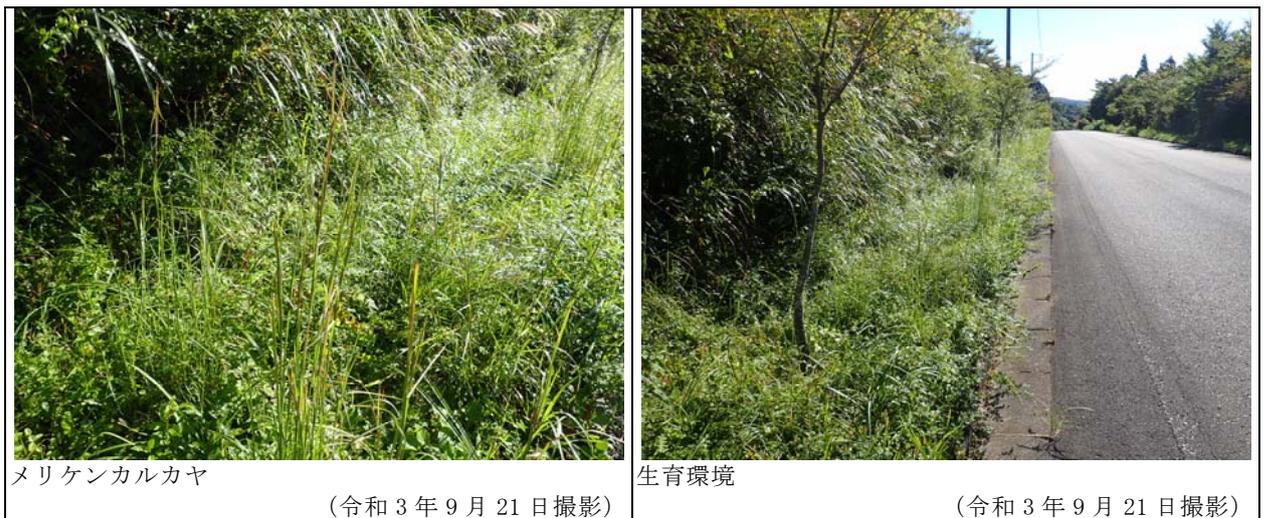


写真 2.2.8 メリケンカルカヤの確認状況写真

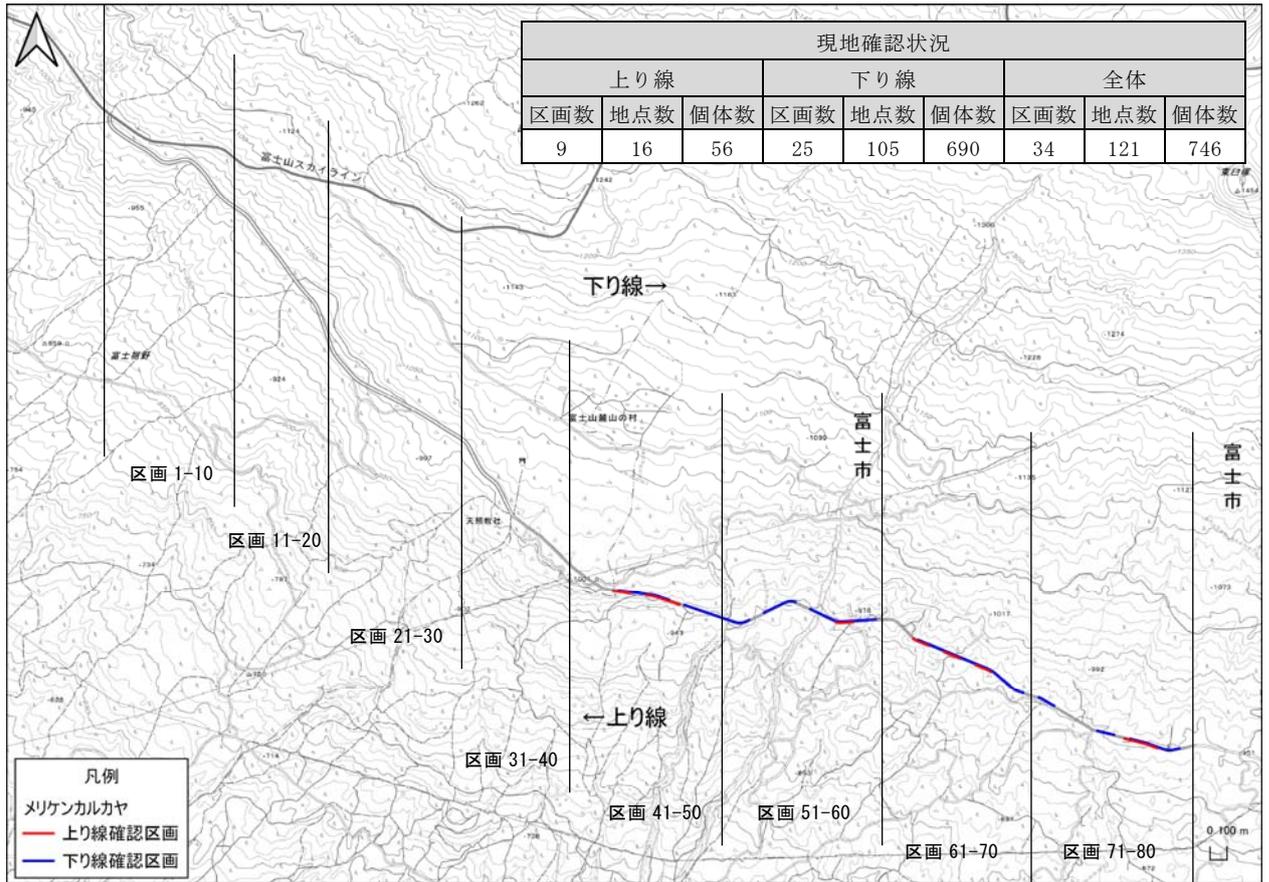


図 2.2.11 メリケンカルカヤの確認位置図

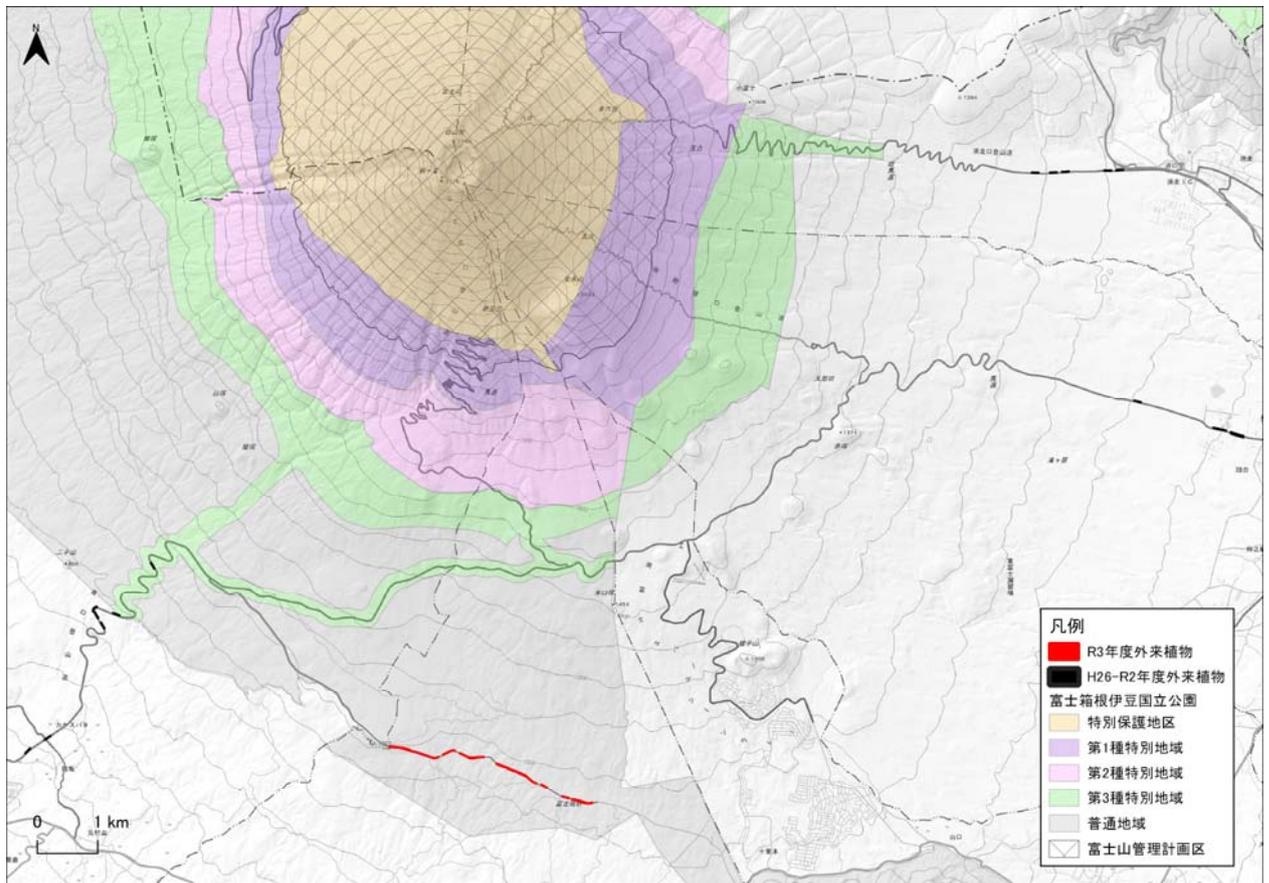


図 2.2.12 メリケンカルカヤの経年確認位置図

2) ハルガヤ

上り線の11区画で、31地点2,586個体、下り線の6区画で22地点944個体、計17区画53地点3,530個体を確認した。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

本業務では確認がなかったが、日当たりの良い草地を好む重要種が確認されている場合は、競合のおそれがあるため除去対策を行う。

表 2.2.8 種の解説（ハルガヤ）

種名等	ハルガヤ（イネ科） 別名・流通名：スイートバーナルグラス
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV.生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	里草地や山地草原
原産地・分布	ヨーロッパ～シベリア原産。アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカ等、温帯に分布。オーストラリア、南米等で侵略的。明治初年に入り、北海道～九州、四国に分布。寒冷地に多い。
特徴	多年草。高さ0.7m。茎は叢生して直立し群生する。秋から春に発生し、花期は5-7月。種子と根茎により繁殖する。全草にクマリンを含み、芳香がある。
生育環境等	草地、放牧地、路傍、荒地、草地、河原、森林に生育し、山地にまでみられる。日当たりの良い所を好み、土壌の種類を選ばない。耐寒性、耐旱性があり、春先の生育が早い。
影響	海外で侵略的とされ、日本でも河川等で分布を広げている。耐寒性があり、山地にまでみられることから、自然性の高い草原へ侵入し、在来種と競合し、駆逐することが懸念される。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



写真 2.2.9 ハルガヤの確認状況写真

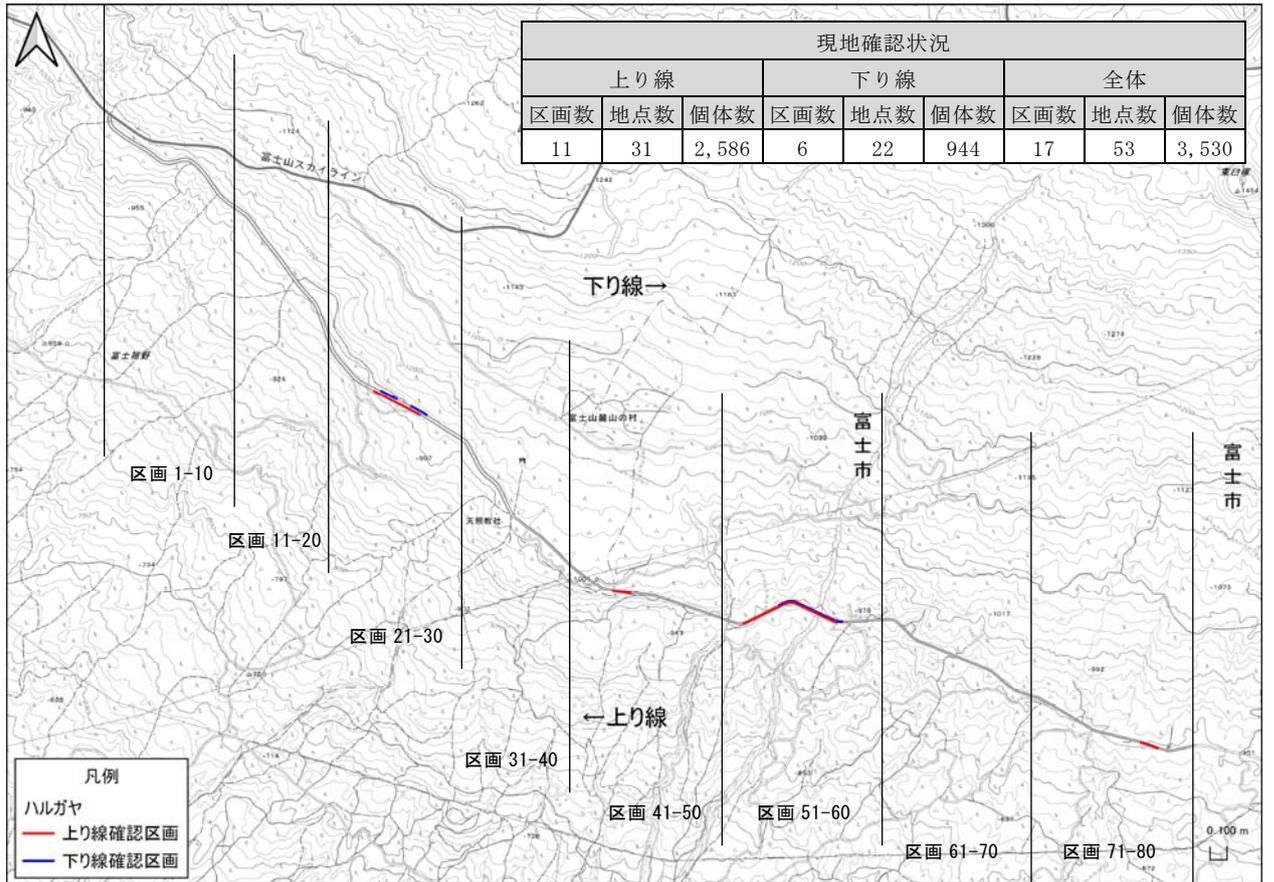


図 2.2.13 ハルガヤの確認位置図

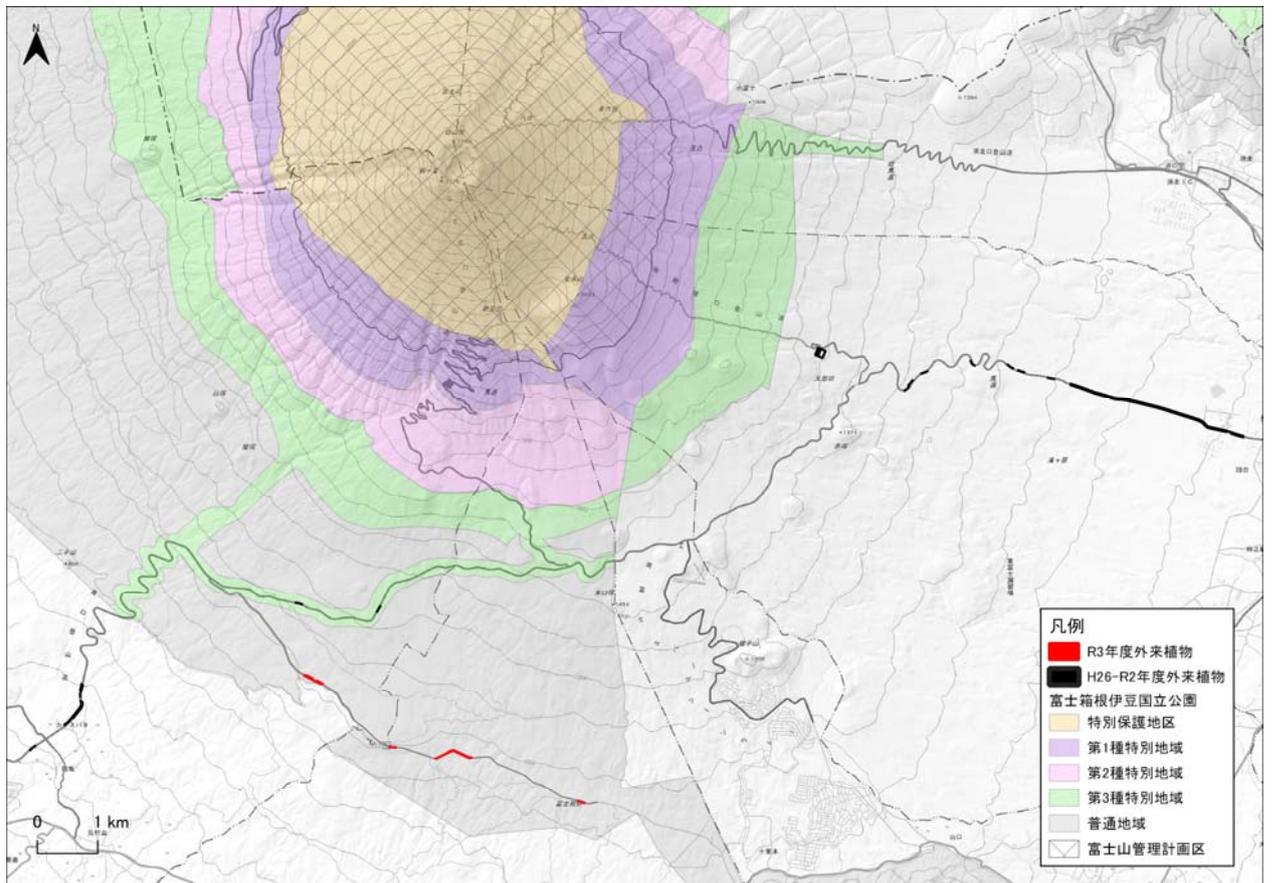


図 2.2.14 ハルガヤの経年確認位置図

3) オオクサキビ

上り線の2区画で、2地点14個体を確認した。下り線では確認がなかった。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

表 2.2.9 種の解説（オオクサキビ）

種名等	オオクサキビ（イネ科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV.生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	湿地や河川敷
原産地・分布	北アメリカ原産。南アメリカ、ヨーロッパ、アジア、ニュージーランド等、温帯を中心に亜熱帯にまで分布。1927年に千葉県に入り、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布。
特徴	一年草。高さ1m。全体に無毛。稈は太く、無毛で弱い。花期は8-9月。小穂は淡紫色を帯び、長さ約2.5mmの長卵形。
生育環境等	畑地、樹園地、牧草地、路傍、荒地、河川敷、湿地に生育する。日当たりの良い、湿った所を好む。水田周辺、道端などに普通な雑草となっている。
影響	河川敷への侵入が問題となっている。湿った場所を好むことから、希少種等が生育する湿地への侵入も懸念される。こうした場所に侵入しないよう、種子の逸出を防止する配慮が必要である。牧草利用する際には、牧草地外への種子の逸出を防止するために、結実前に刈り取り、周縁部の草刈りを適切に行うとともに、利用しない種子については放置せずに適切に処分する。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



写真 2.2.10 オオクサキビの確認状況写真

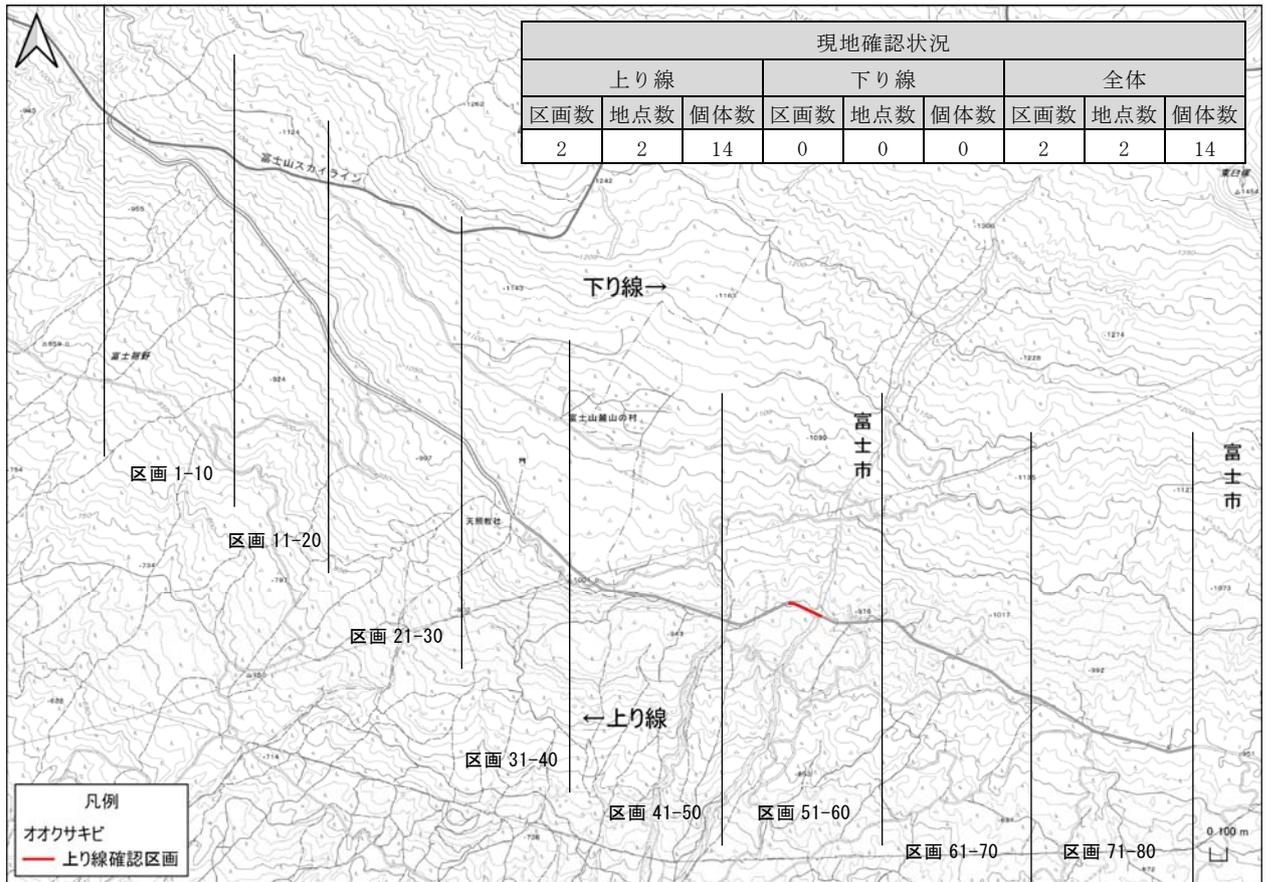


図 2.2.15 オオクサキビの確認位置図

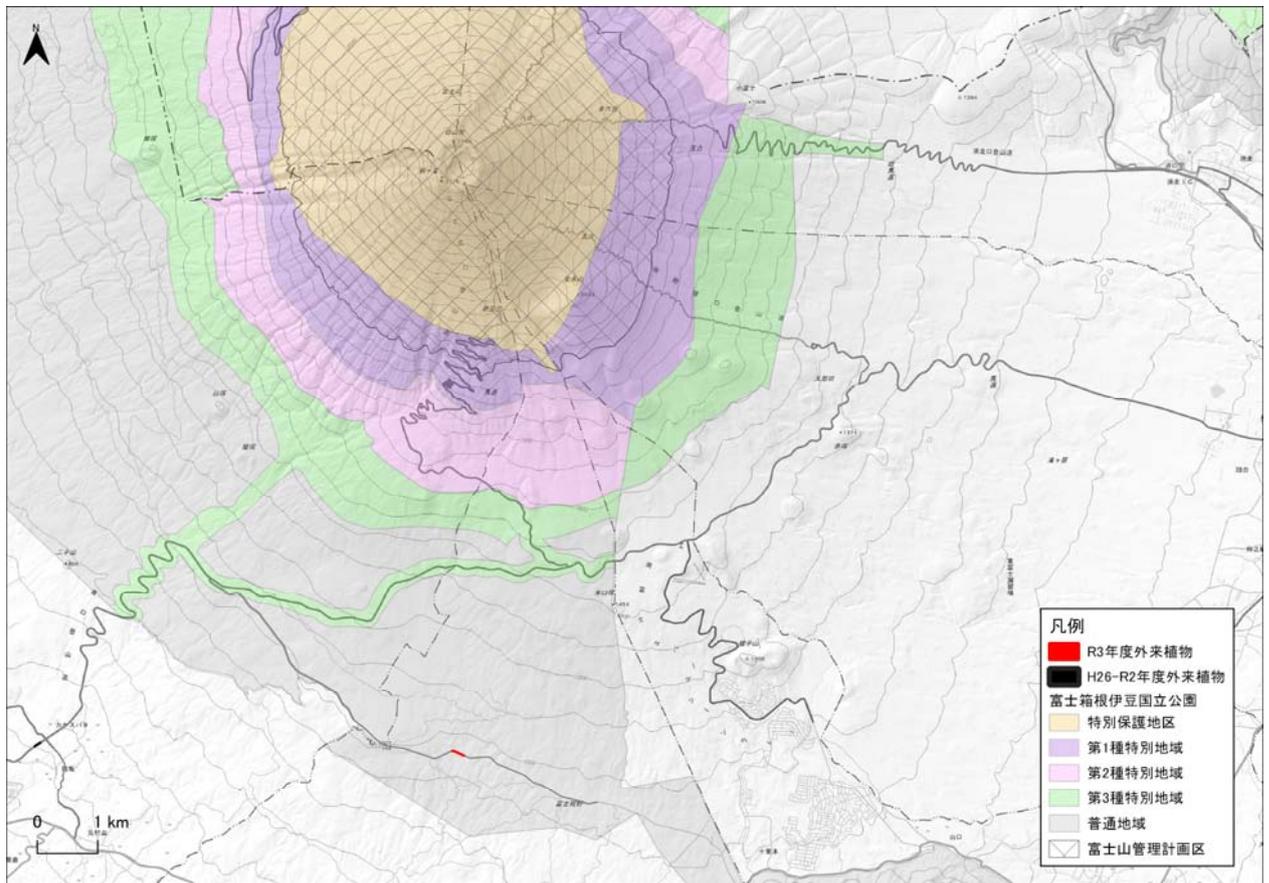


図 2.2.16 オオクサキビの経年確認位置図

4) アレチヌスビトハギ

下り線の1区画で、2地点2個体を確認した。上り線では確認がなかった。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

本業務では確認がなかったが、日当たりの良い草地を好む重要種が確認されている場合は、競合のおそれがあるため除去対策を行う。

表 2.2.10 種の解説（アレチヌスビトハギ）

種名等	アレチヌスビトハギ（マメ科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV.生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	河原、里草地
原産地・分布	北アメリカ東南部原産。カナダで逸出。1940年に大阪で確認。北海道、本州、四国、九州、琉球に分布。
特徴	多年草。茎は高さ1m。花期は7-9月。花は紅紫色の蝶形花で、夕方にはしぼんで赤くなる。果実は扁平で4~6節にくびれる。
生育環境等	荒地、道端、市街地、空地、攪乱地に広がる。関東以西に多い。
影響	一度侵入されると、頑丈な根茎のため、駆除が困難。別学名 <i>Hedysarum paniculatum</i> 。付着しやすい果実で、種子の分散能力が高い。河川でも増加傾向にある。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)

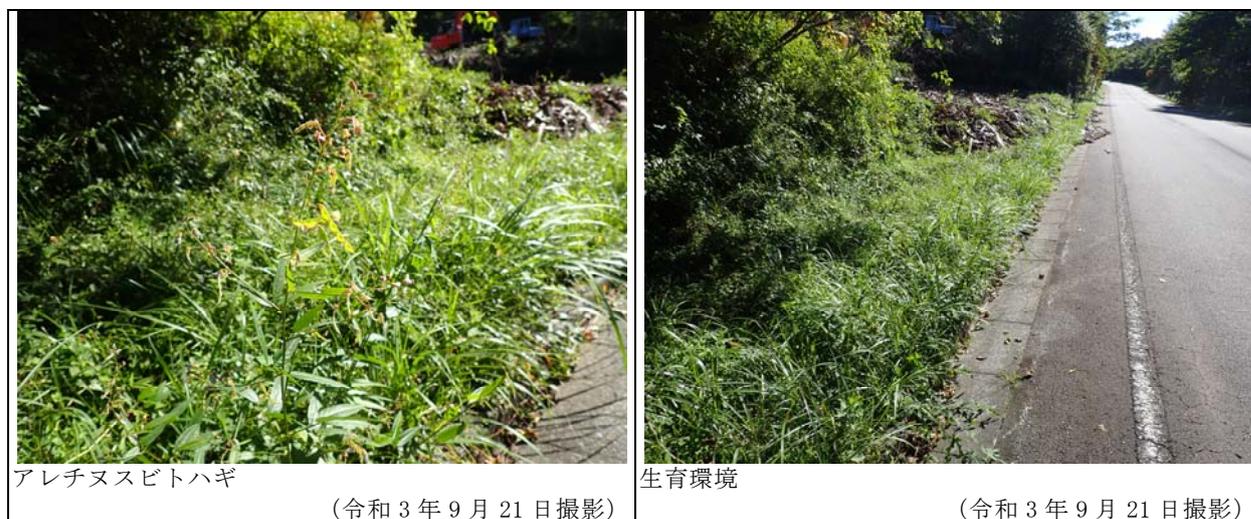


写真 2.2.11 アレチヌスビトハギの確認状況写真

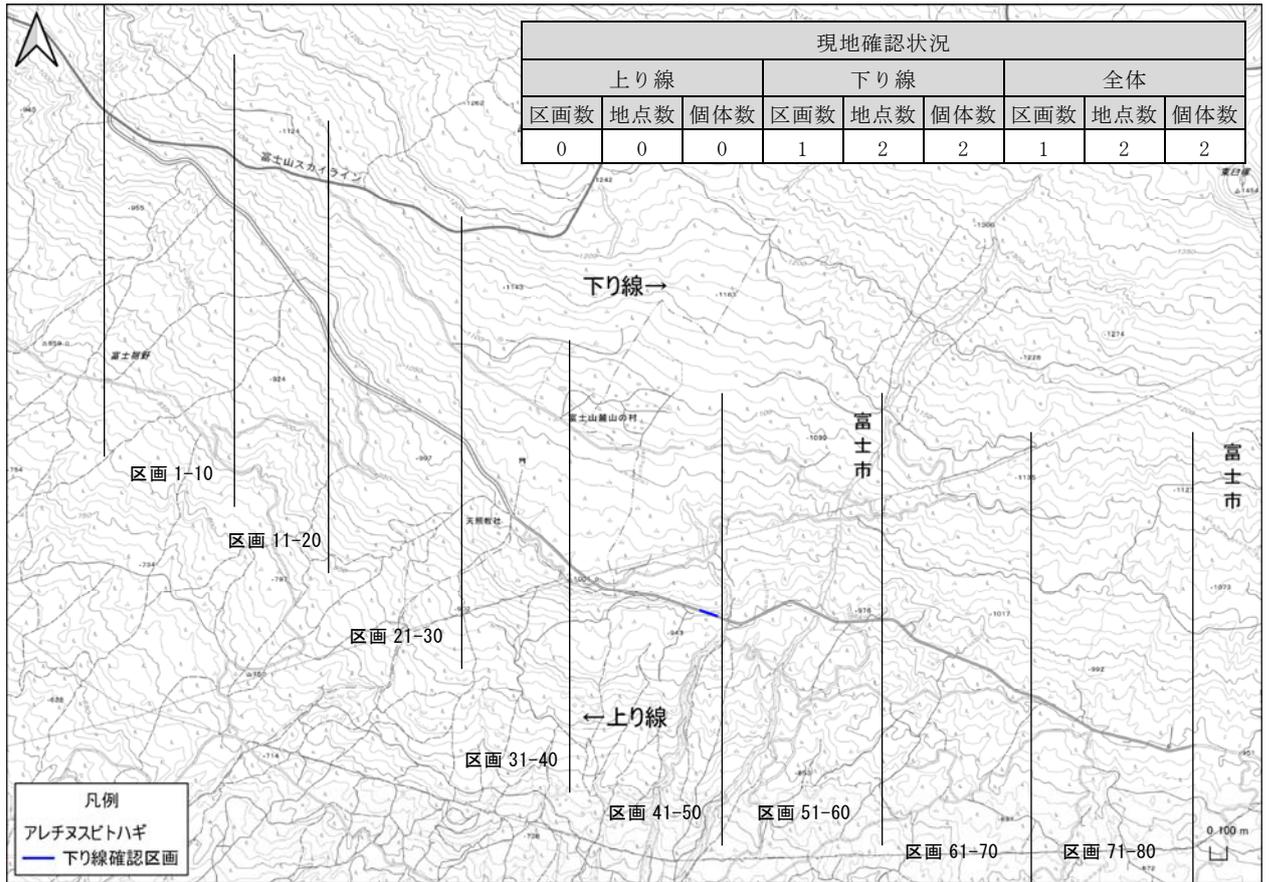


図 2.2.17 アレチヌスピトハギの確認位置図

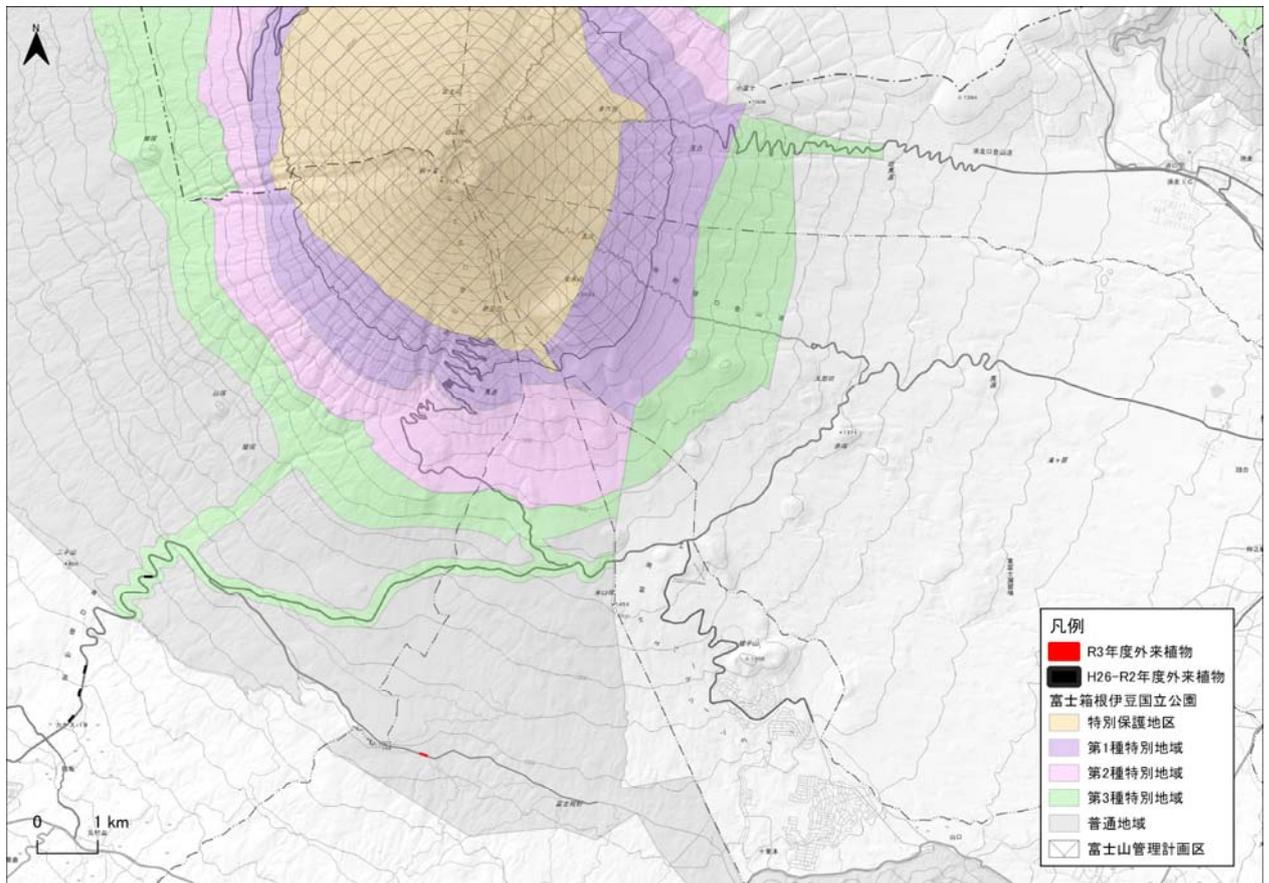


図 2.2.18 アレチヌスピトハギの経年確認位置図

5) ヒメスイバ

上り線の1区画で、1地点8個体、下り線の3区画で3地点45個体、計4区画4地点53個体を確認した。確認地点の環境は路傍の開けた日当たりの良い草地であった。

本業務では確認がなかったが、日当たりの良い草地を好む重要種が確認されている場合は、競合のおそれがあるため除去対策を行う。

表 2.2.11 種の解説（ヒメスイバ）

種名等	ヒメスイバ（タデ科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。 V. 生態系被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えており、かつ分布拡大・拡散の可能性もある。
対策優先度の要件	
特に問題になる地域や環境	海岸砂浜、山地草原
原産地・分布	ヨーロッパ原産。ヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカ、オセアニアに分布。温帯～寒帯を中心に分布し、熱帯～亜熱帯の河内にも広がる。日本へは明治初期に渡来。北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。
特徴	多年草。高さは50cm。花期は4-7月。種子と根茎により繁殖する。種子の伝播は風、雨、動物等による。種子に休眠性がある。アレロパシー作用がある。
生育環境等	芝地、牧草地、樹園地、路傍、荒地などに生育する。ときに亜高山帯まで侵入する。日当たりの良い湿地～半湿地を好む。pHの低い所に適応する。日陰地では生育が悪い。
影響	河川で増加しており、砂浜への侵入が危惧されている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



写真 2.2.12 ヒメスイバの確認状況写真

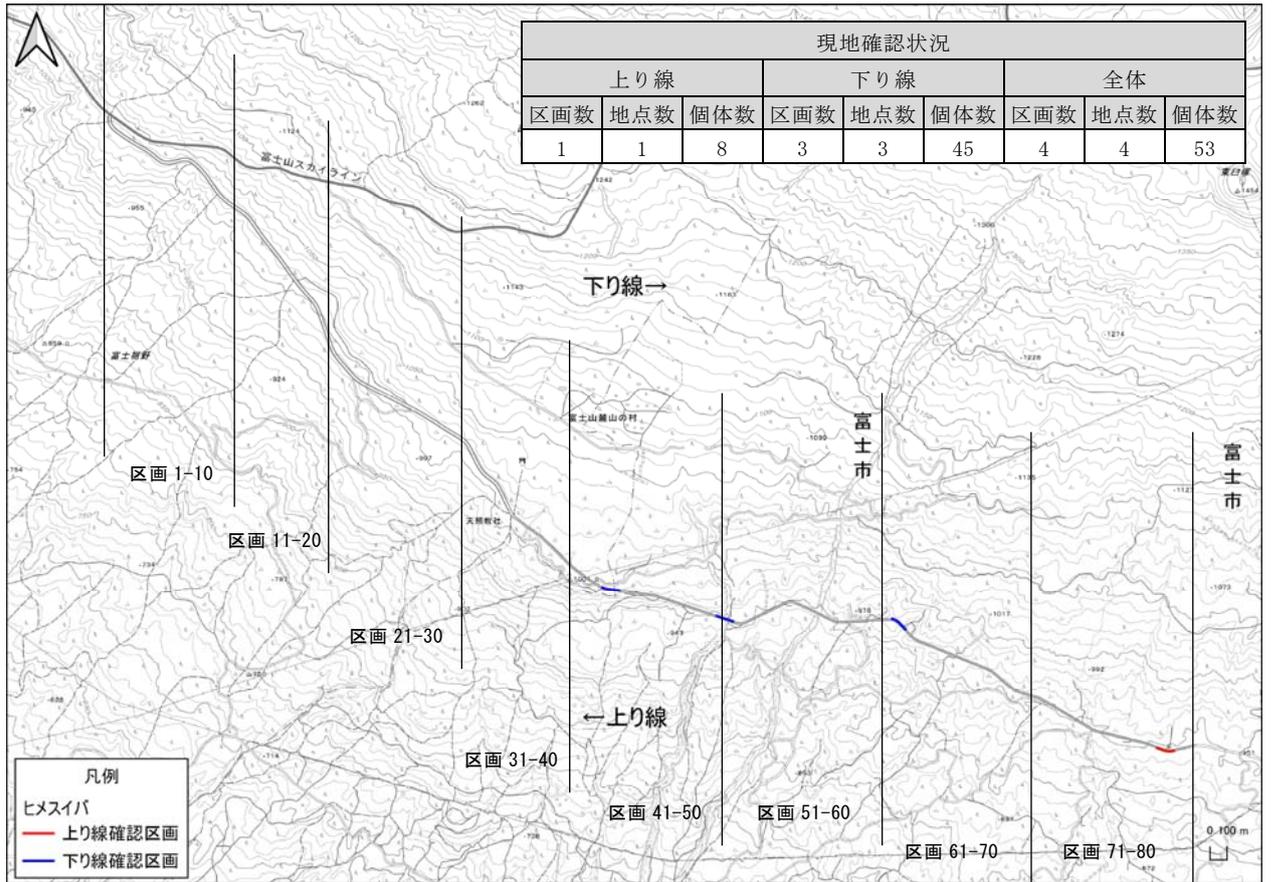


図 2.2.19 ヒメスイバの確認位置図

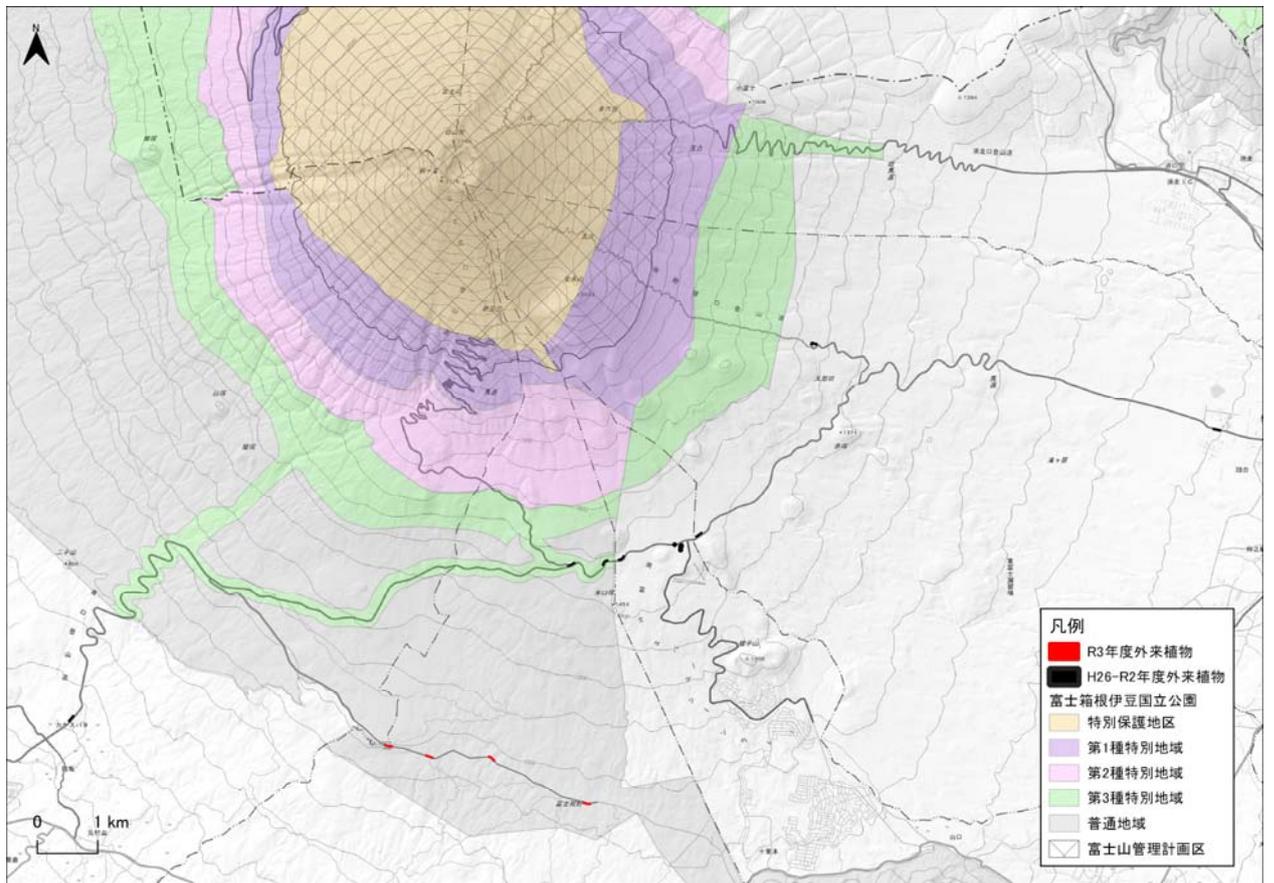


図 2.2.20 ヒメスイバの経年確認位置図

6) エゾノギシギシ

下り線の2区画で、2地点2個体を確認した。上り線では確認がなかった。確認地点の環境は路傍、林縁の草地であった。

本種は、富士山の外来植物ハンドブック（ふじさんネットワーク, 2018）において、「富士山への侵入を防ぎたい要注意・外来植物」として掲載されているため、富士山麓線でも積極的な対策を実施することが望ましい。

表 2.2.12 種の解説（エゾノギシギシ）

種名等	エゾノギシギシ（タデ科） 別名・流通名：ヒロハギシギシ
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	I. 生態系被害のうち交雑が確認されている、またはその可能性が高い。 II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	亜高山帯の自然草原や湿地、ノダイオウなどの在来ギシギシ類の生育地周辺
原産地・分布	ヨーロッパ原産。北アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカに分布。国内へは明治中期頃に渡来。北海道、本州、四国、九州に分布する。
特徴	多年草。高さは0.5-1.3m。花期は6-9月。両性花。瘦果は風、雨、飼料に混入して伝播される。根茎による繁殖力が強い。周年にわたって発生、生育し、耐寒性が強い。
生育環境等	牧草地、樹園地、芝地、畑地、路傍、川岸、荒地、林地に生育する。耐寒性が強いため、亜高山帯の自然公園などにも侵入する。
影響	北海道や、本州の亜高山帯にある国立・国定公園など、自然性の高い環境や希少種の生育環境に侵入し、駆除の対象になっている。世界的に牧草地、樹園地の強害雑草として知られている。一度圃場に入り込むと短期間で拡大する。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>
環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



エゾノギシギシ

(令和3年9月21日撮影)

生育環境

(令和3年9月21日撮影)

写真 2.2.13 エゾノギシギシの確認状況写真

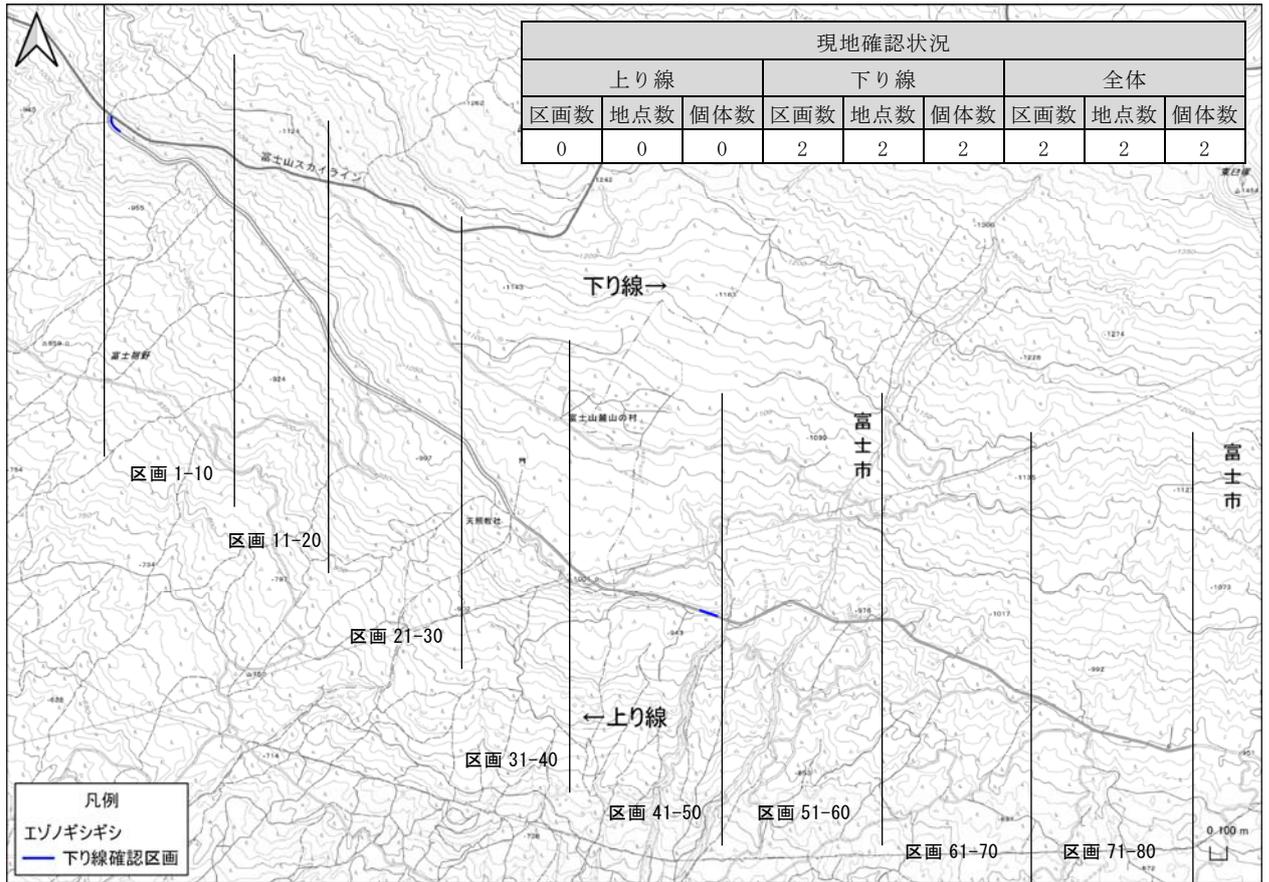


図 2.2.21 エゾノギシギシの確認位置図

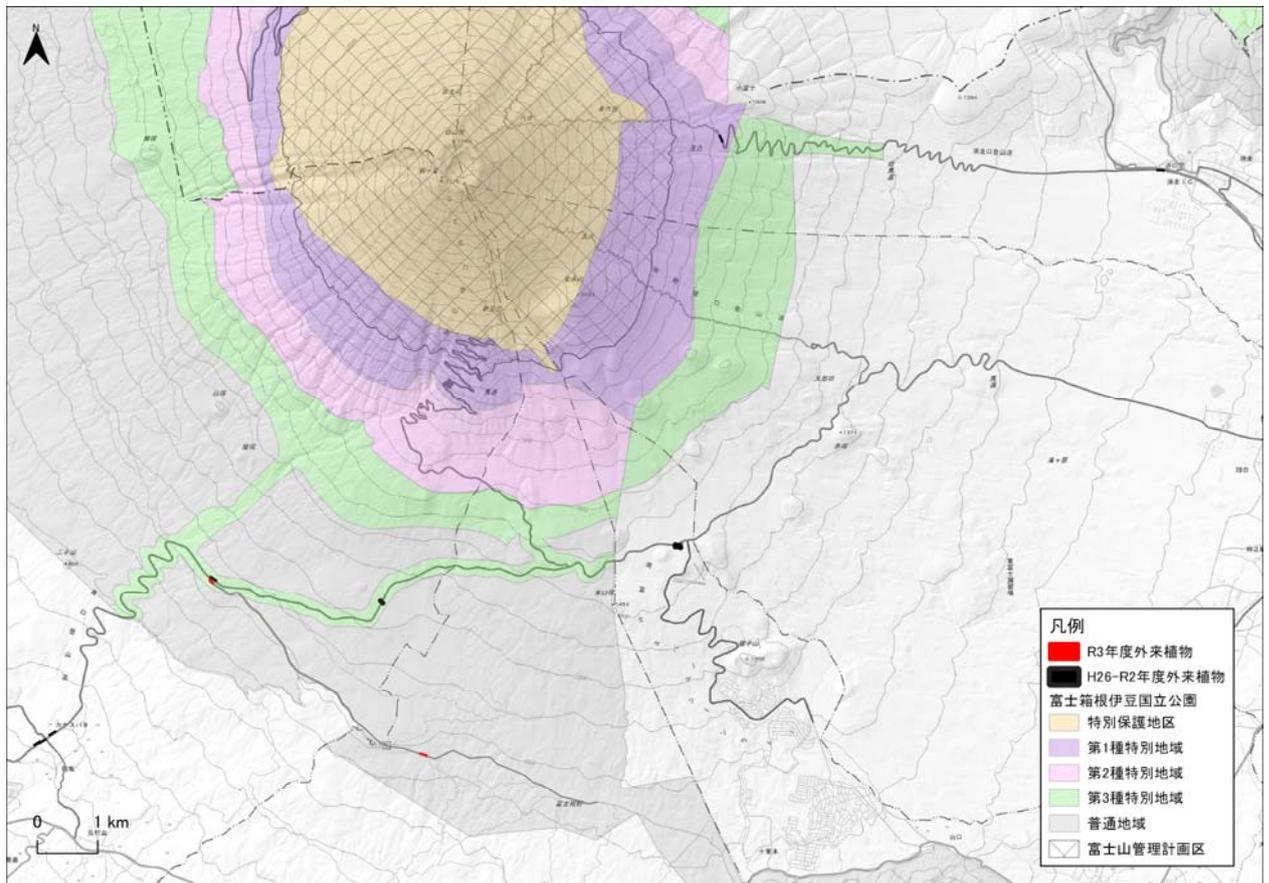


図 2.2.22 エゾノギシギシの経年確認位置図

7) ヒメジョオン

上り線の 77 区画で、790 地点 3,072 個体、下り線の 60 区画で 290 地点 1,428 個体、計 137 区画 1,080 地点 4,500 個体を確認した。全域に広く分布し、一部では群生もみられた。確認地点の環境は路傍、開けた日当たりの良い草地であった。

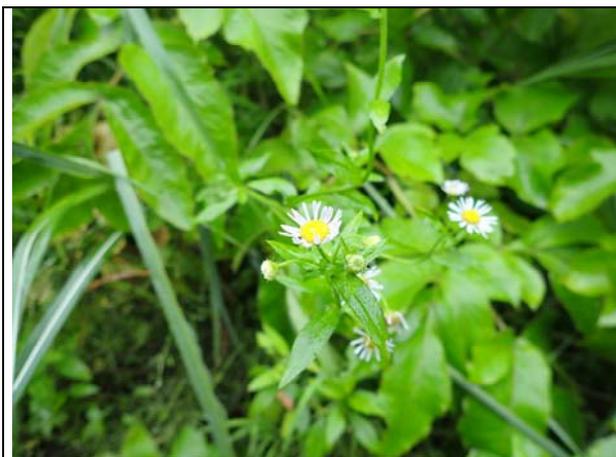
本種は、富士山の外来植物ハンドブック（ふじさんネットワーク, 2018）において、「富士山への侵入を防ぎたい要注意・外来植物」として掲載されているため、富士山麓線でも積極的な対策を実施することが望ましい。

表 2.2.13 種の解説（ヒメジョオン）

種名等	ヒメジョオン（キク科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	山地や亜高山帯の草原
原産地・分布	北アメリカ原産。ヨーロッパ、アジアに分布。国内へは江戸時代末期に渡来、明治初年には広く分布。北海道～九州に分布。
特徴	一年草。高さ 0.3-1.5m。茎は直立し淡緑色であらい毛がまばらに生え、中心部に白色の髄があり中空でない。根生葉は長柄があって円形に近く、大きな深い鋸歯があり、花時には消失する。花期は 6-10 月。瘦果は、風、雨、動物、人間により伝播される。根茎により繁殖する。
生育環境等	畑地、樹園地、牧草地、路傍、荒地などに生育する。土壌の種類を選ばない。低地から高山地帯まで生える。
影響	農耕地の雑草になるとともに、国立公園の亜高山帯のような自然性の高い環境にも侵入し、在来植物との競合が問題となる。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022 年 1 月 17 日確認)



ヒメジョオン

(令和 3 年 7 月 9 日撮影)



生育環境

(令和 3 年 7 月 9 日撮影)

写真 2.2.14 ヒメジョオンの確認状況写真

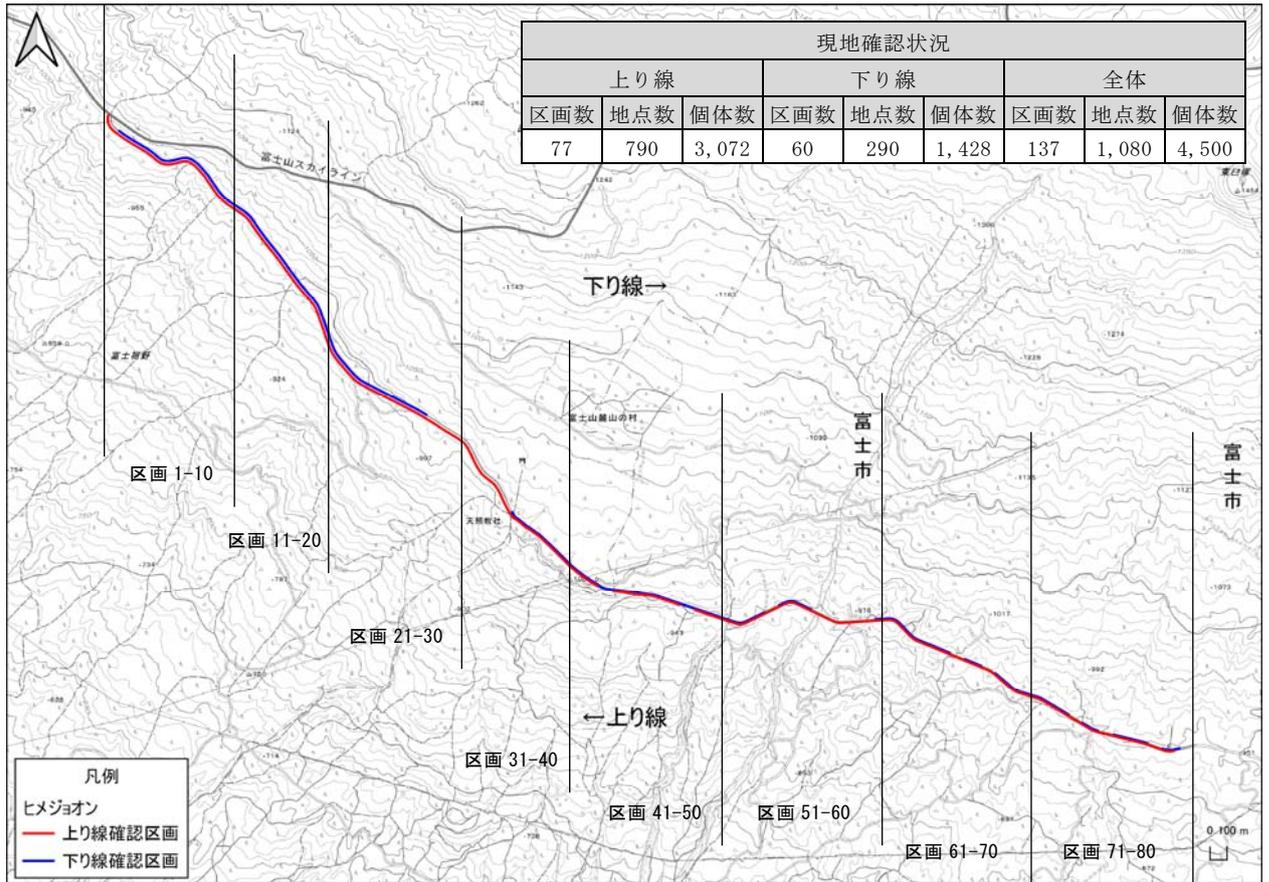


図 2.2.23 ヒメジョオンの確認位置図

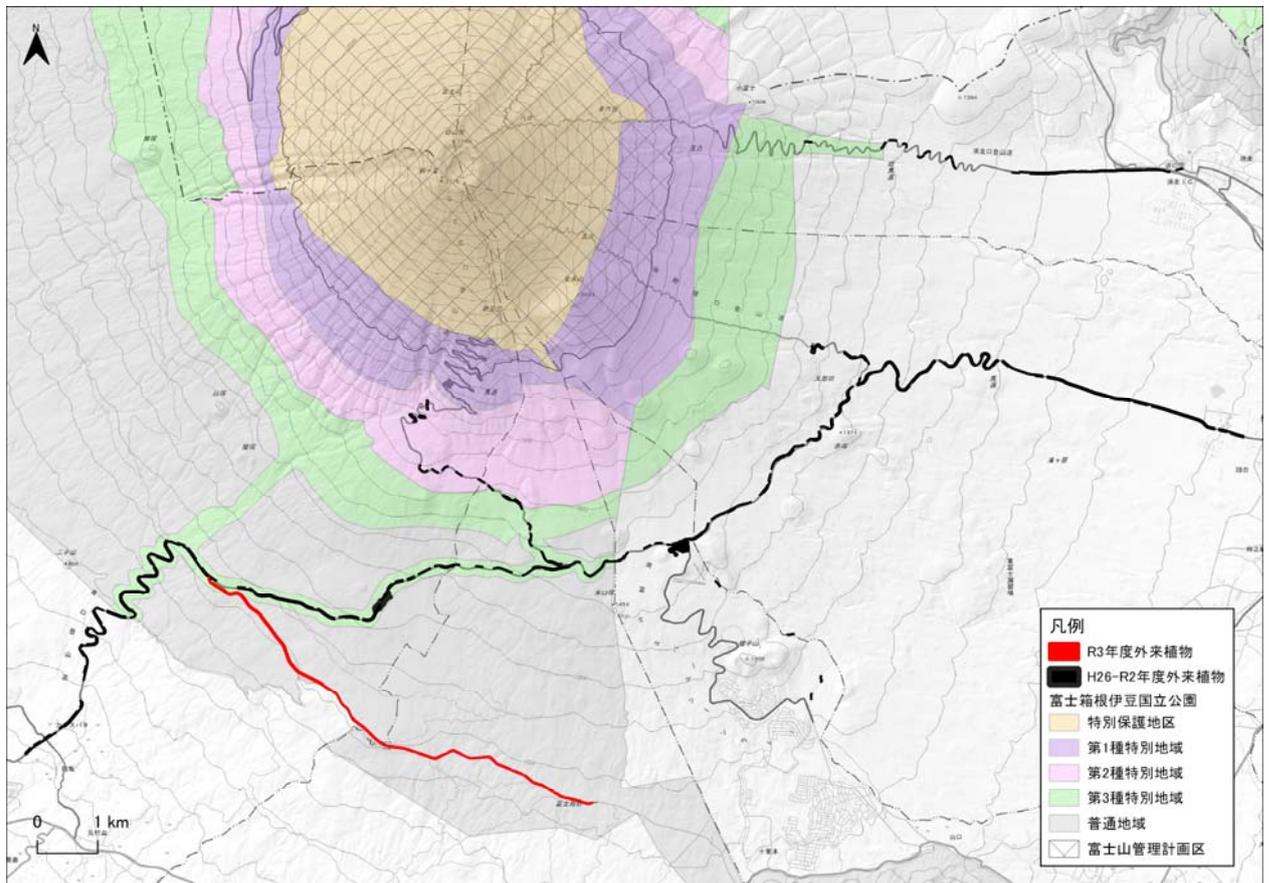


図 2.2.24 ヒメジョオンの経年確認位置図

8) フランスギク

下り線の1区画で、1地点20個体を確認した。上り線では確認がなかった。確認地点の環境は路傍の草地であった。

本業務では確認がなかったが、日当たりの良い草地を好む重要種が確認されている場合は、競合のおそれがあるため除去対策を行う。

表 2.2.14 種の解説（フランスギク）

種名等	フランスギク（キク科） 別名・流通名：-
外来植物 選定基準	外来生物法：- 生態系被害防止外来種リスト：総合対策外来種（その他の総合対策外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	亜高山帯
原産地・分布	ヨーロッパ原産。アジア、南北アメリカ等、温帯に多く、一部は熱帯にも広がる。江戸時代末期に渡来。北海道、本州、四国、九州で逸出。特に北海道に多い。
特徴	多年草。茎は直立、基部で分岐して高さ30～80cm、粗い毛がある。葉は根生葉があり、さじ形で鋸歯があり粗い毛が生える。花期は6月。種子と地下茎で繁殖する。ロゼットを形成して越冬する。
生育環境等	畑地、牧草地、路傍、空地に野生化する。近年は高山にまで侵入しつつある。
影響	高山地域にまで侵入しているため、各地の国立公園等で駆除の対象となっている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



写真 2.2.15 フランスギクの確認状況写真

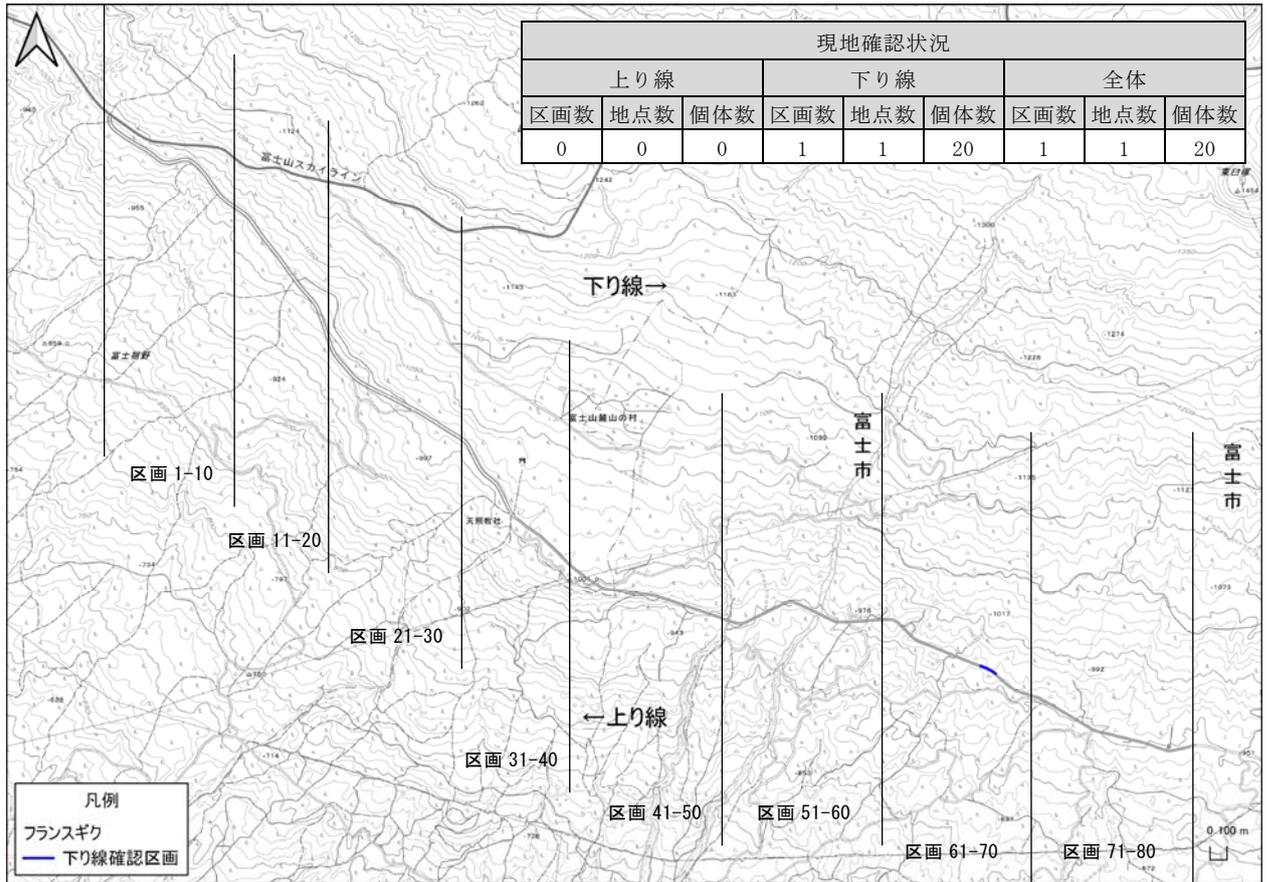


図 2.2.25 フラスギクの確認位置図

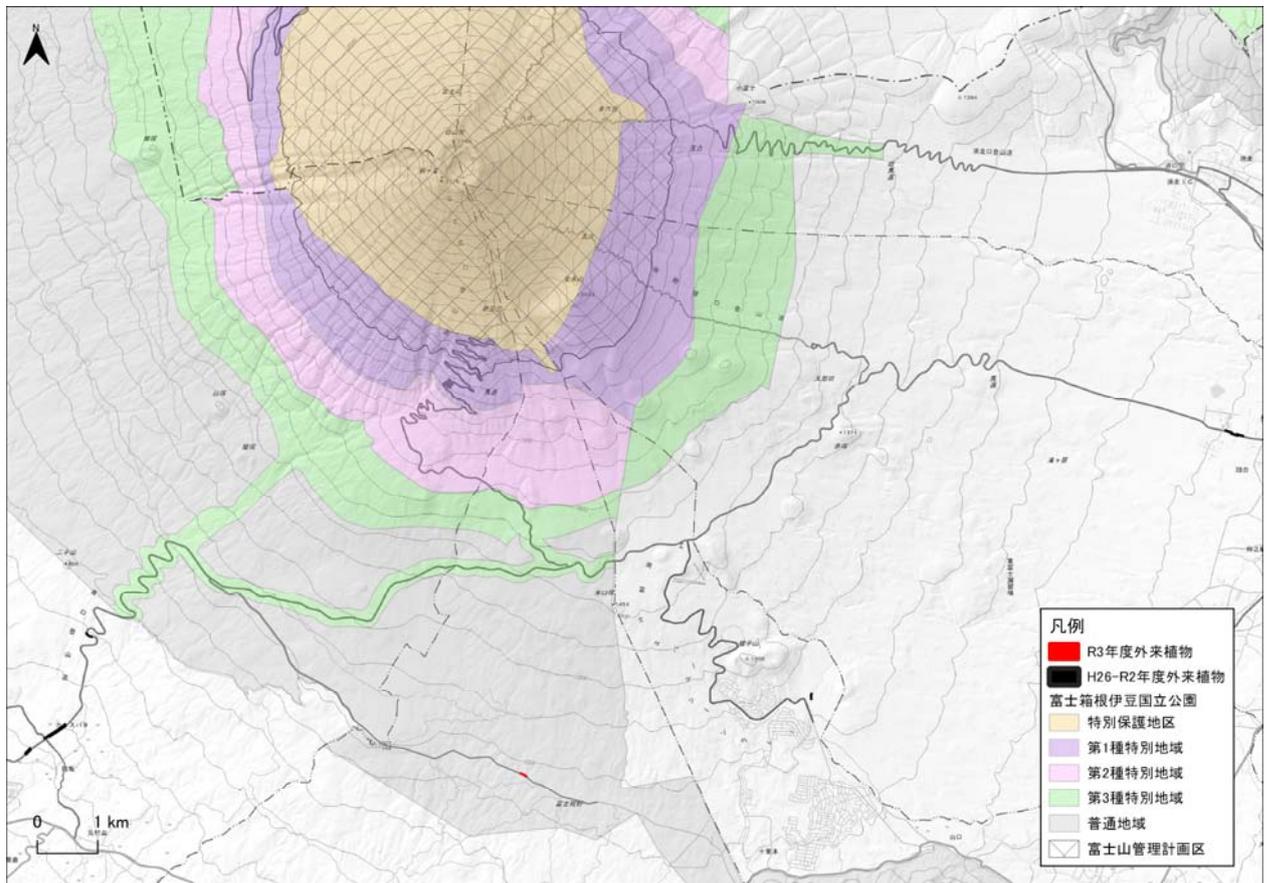


図 2.2.26 フラスギクの経年確認位置図

(3) 産業管理外来種

産業又は公益的役割において重要で、代替性がなく、その利用にあたっては適切な管理を行うことが必要と定義される、産業管理外来種は、カモガヤ、ナギナタガヤの1科2種を確認した。

1) カモガヤ

上り線の29区画で、69地点176個体、下り線の18区画で39地点256個体、計47区画108地点432個体を確認した。地点あたりの個体数は少ないが広く分布がみられた。確認地点の環境は路傍の開けた日当たりの良い草地であった。

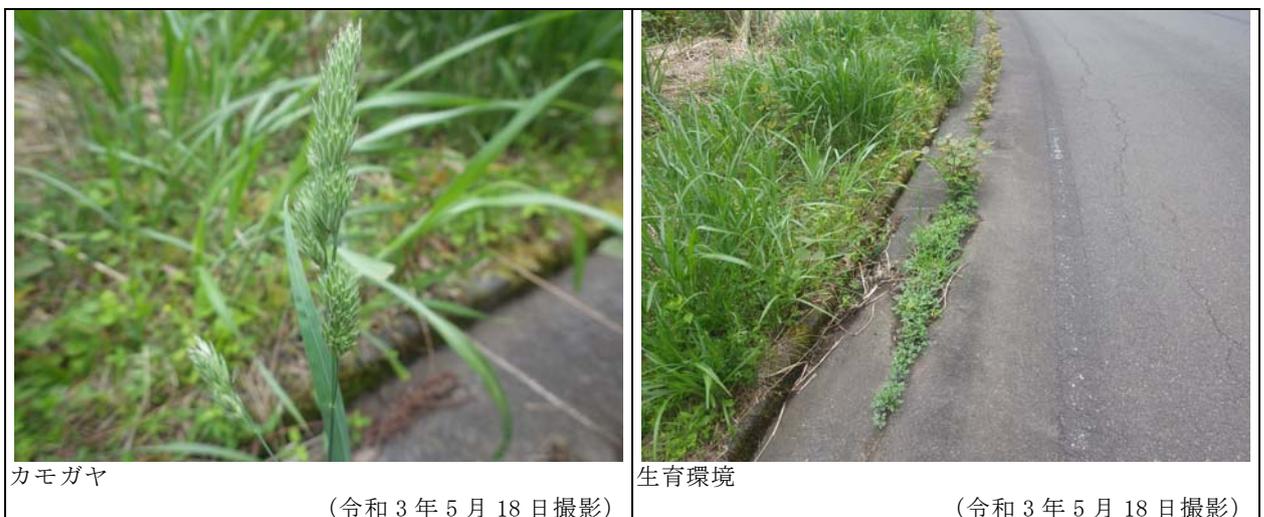
本種は、富士山の外来植物ハンドブック（ふじさんネットワーク、2018）において、「富士山への侵入を防ぎたい要注意・外来植物」として掲載されているため、富士山麓線でも積極的な対策を実施することが望ましい。

表 2.2.15 種の解説（カモガヤ）

種名等	カモガヤ（イネ科） 別名・流通名：オーチャードグラス
外来植物 選定基準	外来生物法：－ 生態系被害防止外来種リスト：適切な管理が必要な産業上重要な外来種（産業管理外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	II. 生物多様性の保全上重要な地域で問題になっている、またはその可能性が高い。 IV. 生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	山地草原
原産地・分布	地中海～西アジア原産。ヨーロッパ、アフリカ、アジア、オセアニア、南北アメリカ等の温帯に分布。国内へは1861～1864年に渡来。1868年にアメリカから導入。北海道、本州、四国、九州、琉球に分布。
特徴	多年草。高さ0.4～1.5m。開花期は5～6月。種子の生産量は多く、風、雨、人間、動物に付着して運ばれる。根茎により繁殖するが、根茎は短く匍匐茎を伸ばさない。再生力は旺盛である。
生育環境	畑地、樹園地、路傍、荒地、土手、草地、河川敷、林縁、湿地、沿岸域等に生育する。日当たりの良い温暖地で、肥沃な所を好むが、環境適応性は幅広い。耐陰性が強いことが特徴である。
影響	北海道や本州の亜高山帯にある国立公園の自然草原へ侵入し、草原に特有な希少種等への影響が問題となっている。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



カモガヤ

(令和3年5月18日撮影)

生育環境

(令和3年5月18日撮影)

写真 2.2.16 カモガヤの確認状況写真

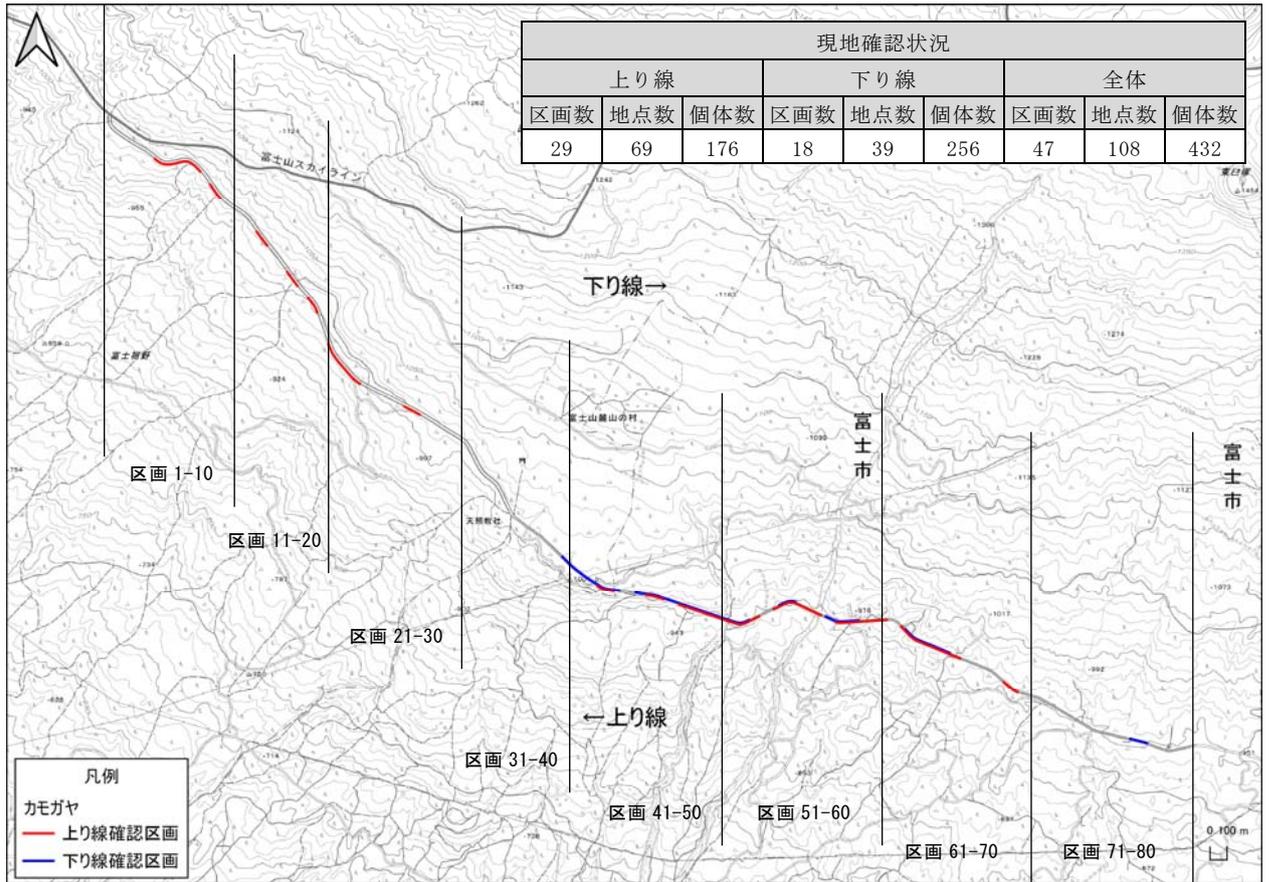


図 2.2.27 カモガヤの確認位置図

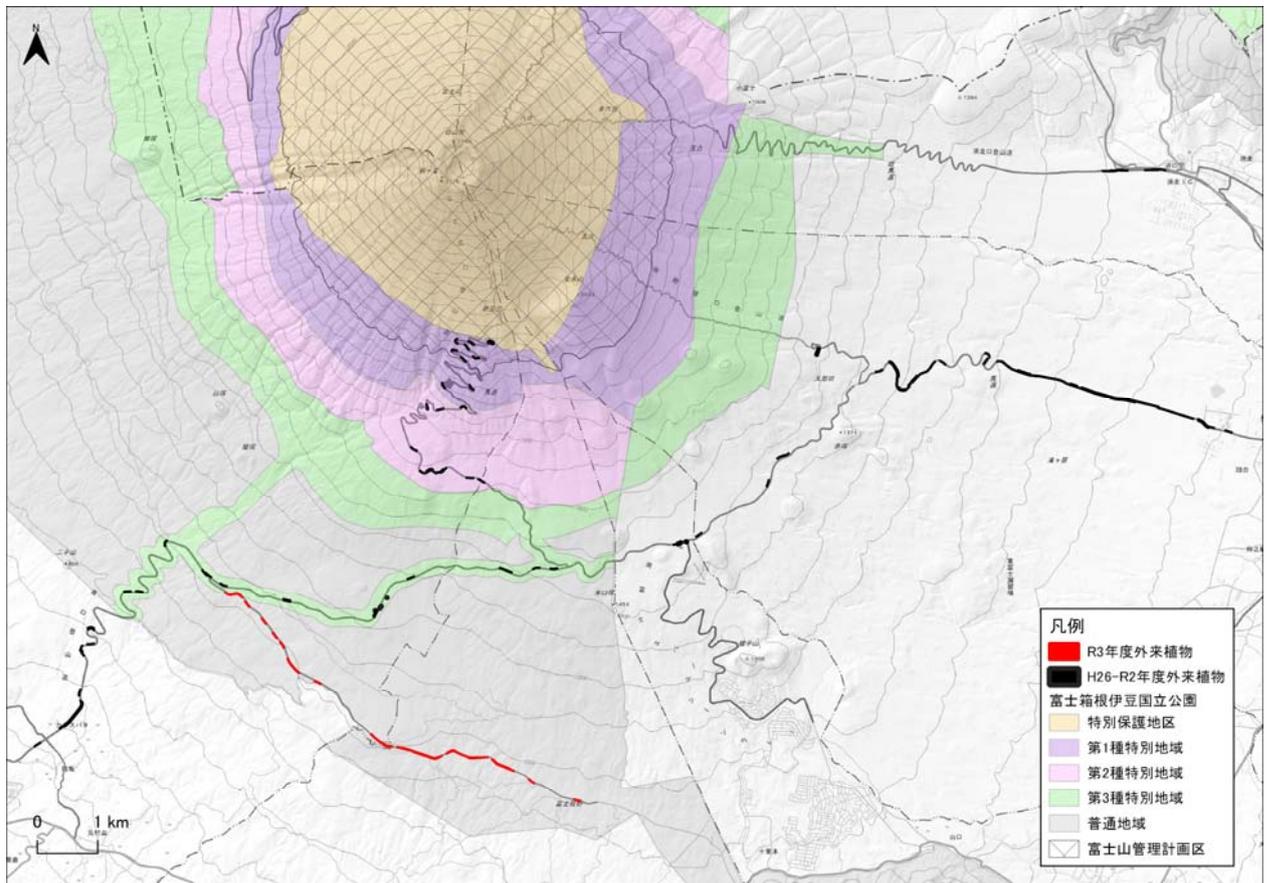


図 2.2.28 カモガヤの経年確認位置図

2) ナギナタガヤ

上り線の5区画で、5地点11個体を確認した。下り線では確認がなかった。確認地点の環境は道路のアスファルト舗装の割れ目であった。

本業務では確認がなかったが、日当たりの良い草地を好む重要種が確認されている場合は、競合のおそれがあるため除去対策を行う。

表 2.2.16 種の解説（ナギナタガヤ）

種名等	ナギナタガヤ（イネ科） 別名・流通名：ネズミノシッポ
外来植物 選定基準	外来生物法：－ 生態系被害防止外来種リスト：適切な管理が必要な産業上重要な外来種（産業管理外来種）
定着段階	分布拡大期～まん延期
選定理由	IV.生態系被害のうち競合または改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。
対策優先度の 要件	
特に問題になる 地域や環境	海岸砂地、草原
原産地・分布	ヨーロッパ～西アジア原産。アフリカ、アジア、オーストラリア、南北アメリカ、大西洋諸島、太平洋諸島などの温帯～暖帯に分布する。オーストラリアでは侵略的である。国内へは明治初年に入り、北海道、本州、四国、九州、琉球に分布する。
特徴	一年草。高さ0.6m。株立ちとなって根茎がなく、全体に粉緑色をおびる。葉は幅1mmほどの線形で縁は内側に巻き込む。花期は5-6月。多数の小穂を一方向に向けて密につける。
生育環境等	畑地、牧草地、庭、路傍、荒地などに生育する。日当たりの良い砂質土壌を好む。海辺の砂地、乾いた草地に多い。
影響	海外で侵略的な外来種とされ、日本でも河川等で分布を拡大している。

出典)我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト 掲載種の付加情報（根拠情報） <植物>

環境省ホームページ (<https://www.env.go.jp/nature/intro/2outline/iaslist.html>) (2022年1月17日確認)



写真 2.2.17 ナギナタガヤの確認状況写真

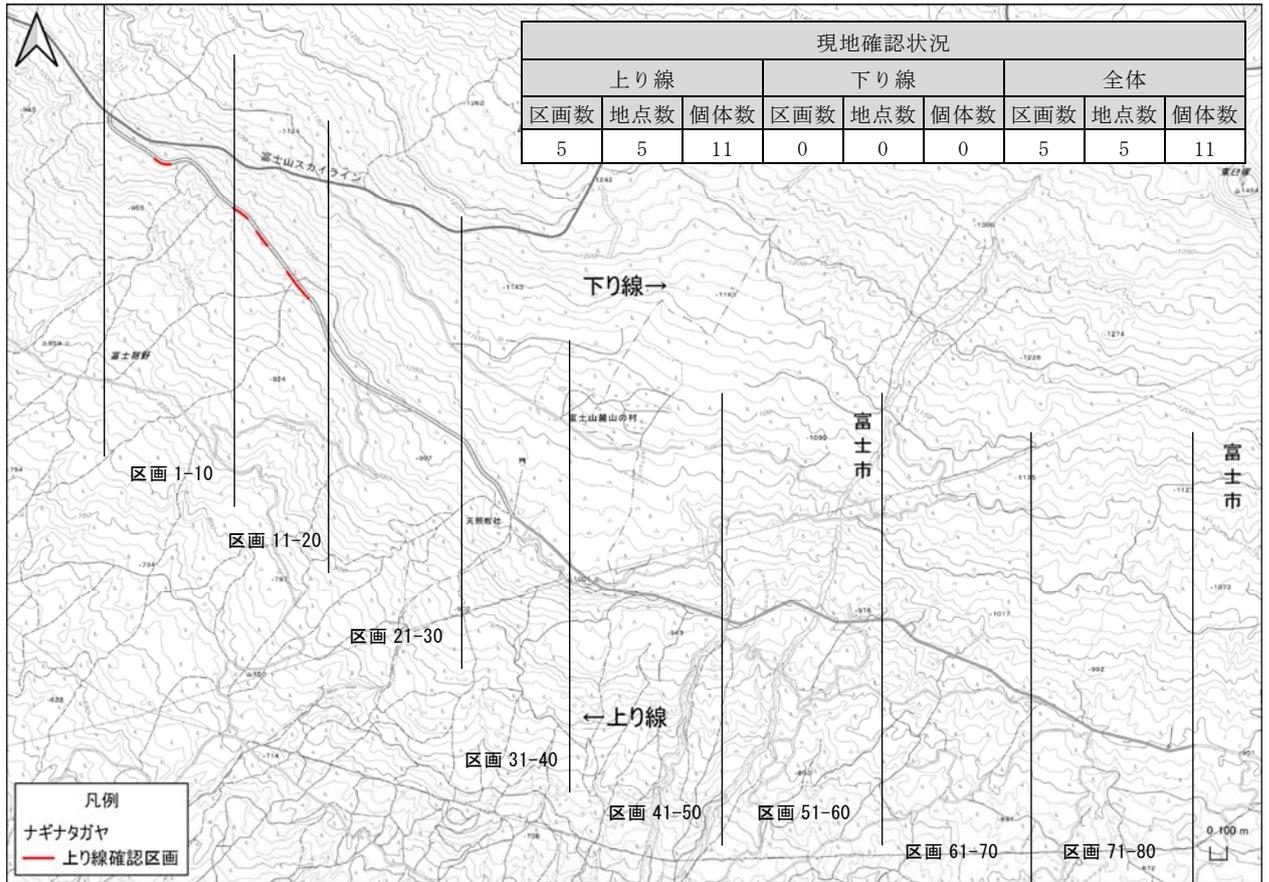


図 2.2.29 ナギナタガヤの確認位置図

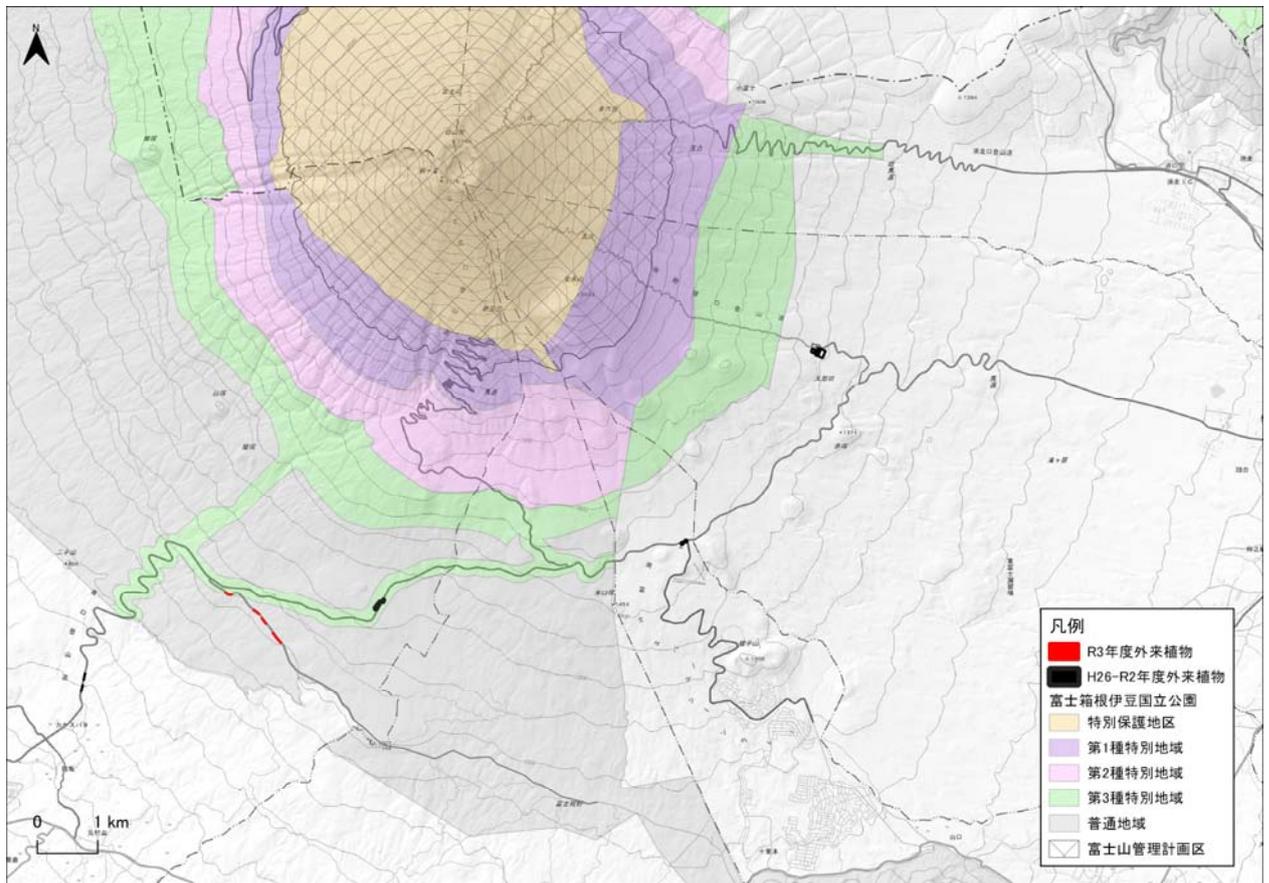


図 2.2.30 ナギナタガヤの経年確認位置図